ゆっくりれいむとゆっくりまりさのThe☆クイズでしていってね！！！

ソドー鉄道員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゆっくりれいむとゆっくりまりさのＴｈｅ☆クイズでしていってね！！！

【Ｎコード】
Ｎ１５３５Ｖ

【作者名】
ソドー鉄道員

【あらすじ】
退屈な毎日を送っていたゆっくりれいむが、　ある日ひょんなことからゆっくりまりさとデフォ子と一緒にクイズ番組を作ることになった。
しかし……ゆっくりコンビがお送りする理不尽な問題に生き残れることができるか！？
（＊この小説は台詞方式、クイズ方式、変な茶番が含まれております）

プロローグ&第1問（前書き）

ご注意！！

これから始まる小説は
東方ｐｒｏｊｅｃｔキャラ、及び二次創作とゆっくりが含まれております
読みたくない、またはアレルギーの方はブラウザの戻るボタンを押すべし！！。
あと、批判は断る！！　（＊、ω、＊）←うちのバカ作者　ｂｙ　ゆっくりれいむ

ゆっくりれいむ
「この小説は、ステレオＨｉ－Ｆｉで録音しております。
　大音量でお楽しみください」

ゆっくりまりさ
「夜も更けてまいりました、
　ご近所の迷惑にならぬよう…
　音量を下げて、お楽しみください。」

　パティン！

ゆっくりまりさ
「……話をしよう、アレは今から今から３６万…いや、１万４００年前だったか…まぁいいぜ。
　私にとってはつい昨日の出来事だが、君たちにとっては多分…「明日」の出来事だ」

…私が神社でれいむとスキマ抜き（言うなればトランプ）をやっていた時に、れいむの奴が退屈そうに私に話しかけた。
なんて言ったらいいか、確かあいつがこう言ったのは……

ゆっくりれいむ
「ねぇまりさ、退屈だからクイズ番組やらない？」

そうあいつは最初から退屈で仕方なかったんだぜ。
大体クイズ番組って何だよ……まぁ、実は私も退屈だったらいい暇つぶしになったよ。

—ゆっくシャダイ—

ゆっくりまりさ
「はいはい、茶番はここまでにしといてとっとと本番に行きますよ」

プロローグ&第1問

「コラー！ゆっくりー！！」

ここはお馴染みの博麗神社。
いつものように、霊夢の怒声が神社中に響き渡る。
彼女は怒りを発してゆっくりれいむを追いかけまわしていた。……理由はと言うと…。

「あんたまた掃除サボるつもり！？」

毎回、掃除をサボっているゆっくりれいむにとうとう堪忍袋の緒が切れて、追いかけていた。
そして当のゆっくりれいむは逃げながら霊夢に話しかける。

「サボりじゃない！私はこれから外の世界で仕事があんのよ！。C☆GO☆TO！」

そう言いながらゆっくりれいむは霊夢から逃げ回った
霊夢がちょっと躓いたところを見て、ゆっくりれいむは一目散で神社を後にした……ワケではなかった。

ガシッ！

背後から霊夢の手が彼女の頭をガシッと掴んだ。
上手く逃げようにも、時すでに遅しであった、呆気なくゆっくりれいむを掴んだ張本人にむぎゅっと抱かれてしまった。

「ハァ…ハァ……今日と言う今日は絶対に逃がさないわよ！」

ゼーハーゼーハーと息を切らしながら、ゆっくりれいむを抱きしめる霊夢。
ゆっくりれいむがジタバタともがくが、彼女が抱きしめているので簡単に逃げられなかった。
霊夢は、ゆっくりれいむを厳しい目で睨む。

「いつもいつも仕事仕事って言い訳ばっかりして、居候なんだから掃除の手伝いでもしなさいよ！」
「やめて！離して！。本当に仕事なんだよ！、お願い！信じて！」
「信じられないわね、大体あんた、外の世界で仕事してるんなら仕送りぐらいしたらどうなの」

そう言ってゆっくりれいむを離さない。
それもそうだ、霊夢はこうも何回もゆっくりれいむの嘘に騙されては逃がしてしまっているのだ。
だが、今回は霊夢も策を考えて逃がさないように、トラップを仕掛けたりもしていた。
……と、言っても、すずめを捕まえるための単純な罠で捕まるゆっくりれいむもゆっくりれいむだ。

「とにかく、ちゃんと掃除はしてもらうわよ」
「チッ」

ゆっくりれいむは、どうしても大事な仕事をしたくてしたくて仕方が無かった。
霊夢がゆっくりれいむを抱いたまま、箒を撮りに行く途中で、またしても彼女の悪知恵が浮かんだ。
彼女は、タイミングを待ち…霊夢が箒を掴んだとき……ゆっくり

れいむは行動を起こした！。

「霊夢」

「何よ？」

一体、何を考えたのかと思いきや、ゆっくりれいむはいきなり霊夢に声をかける。

霊夢は、また何かロクでもないことを考えているのであろうと思っていながら……

「……ふぅ～」

「ひゃぁんっ！？／／／」

油断をしてしまい、ゆっくりれいむが自分の耳に息を吹きかけてきた。

誰だってこんなことをされれば変な声を出して力が抜けて行く、次第に霊夢の目はトロンと惚け、顔を真っ赤に染めてガクンと腰が抜けて……

ついにゆっくりれいむを抱きしめていた腕の力を緩めてしまった。

隙を見たゆっくりれいむはあっという間に霊夢の腕からシュンッと抜けだして、そのまま一気に逃走した。

ハッと我に目覚めた霊夢は、ゆっくりれいむが逃げ出したのに素早く気づき、ゆっくりれいむを追いかけた。

「ハッ！しまった…！」

「ふーはははは！！油断したな小娘！、やーいやーい！！」

「ま・ち・な・さぁぁぁぁぁぁい！！！。待てって言ってんでしょ……ふぎゃっ！」

ズザザーッ

耳に息を吹きかけられて、更には変な声を出してしまった恥ずかしさと怒りで顔を真っ赤にした霊夢が追いかけようにも……

あっけなく、箒につまづいて転んでしまい、そしてゆっくりれいむは一目散に神社を後にした。

すぐに起き上がるが、ゆっくりれいむはもうどこにも居なかった。

「ハァ…ハァ……あ、あのアホ饅頭…！帰ったらただじゃすまないわよ…！（怒」

怒りのオーラが瞬く間に飛び出て、拳を握りしめながら神社の石段を睨み続ける霊夢。

そんな彼女たちのやり取りを、神社の屋根の上でじっと見続けていた人物……八雲紫は、こっそりと呟いた。

「相変わらず賑やかね……」

「まーりさー！デフォ子ー！ごめーん！」

そしてここは外の世界のとあるスタジオ。

スタジオの入り口では、ゆっくりれいむの相方のゆっくりまりさと、ゆっくりれいむとゆっくりまりさの親戚である唄音ウタことデフォ子がイライラしながら待っていた。

「やっと来た…」

「遅いぜれいむ！何やってたんだ！？」

待ち切れたのかゆっくりまりさは、やっと来たゆっくりれいむに怒鳴る。

ゆっくりれいむは息をゼェゼェしながら、２人に謝った。

「いやー、ごめんごめん。ちょっとごたごたがあって」

実は霊夢と言い争っていて追いかけっこしていたのはデフォ子にも内緒にしているのであんまり口が裂けても言えないのである。

幻想郷のことは外の世界で行き帰りが出来る、ゆっくりれいむとゆっくりまりさの２人だけの秘密なのだ。

「全く、久々に顔を見ると言うのに遅刻するなんて。次に遅れたら承知しないからね」

「いや、ほんとにごめんね。今度から気を付けるから」

だけど、デフォ子はプイッとゆっくりれいむに顔をそむけた。

顔は見えないが、眉をひそめて怒っているようだった、ゆっくりれいむはどうしようかと悩みに悩んだ挙句……

「ご飯おごるから！」

「お米はあきたこまちで！」

……あっさりデフォ子はゆっくりれいむを許した。そう、彼女はお米が大好物なのである。

なので、ゆっくりれいむは彼女の機嫌を直すためにご飯をおごらなければならなくなった。

基本的に優しいデフォ子が怒るとＲＰＧ弾をぶっ放してくるのだ。

そんなことになれば饅頭妖怪であるゆっくりれいむは焼きまんじ

ゅうになるのが落ちだ、彼女は覚悟を決めてデフォ子にご飯をおごることになった。

「（うぅ……わ、私の報酬がデフォ子の食事でパーン……）」

ゆっくりまりさ
「はい、と言うことでいきなりここでクイズです！。
ちなみに、今のは私たちの回想でした、どーもすまんせんしたｗｗ。
次回からは、台詞方式のクイズコーナーになります、御了承願うことをお願い申し上げます」

ゆっくりれいむ
「それでは、尺の都合もございますので、今から問題を出します」

問題：
「きかんしゃトーマス」に登場するトーマスのモデルとなった機関車は実在するか？

？：実在する
？：実在しない
？：どちらでもない
？：五郎（機関車じゃありません）

ゆっくりれいむ
「はい、今回の問題は、うちのバカ作者が大好きな作品からの問題です。
正解された方の中から、「ゆっくり名物　ゆっくり饅頭（を山葵

風味）」をプレゼントいたします。
ただし、正解が外れた方は罰ゲーム「デフォ子のＲＰＧ弾避け」の的として参加してもらいます」

ゆっくりまりさ
「答えが分かりましたら、感想欄とメッセージに答えを書いてください。
ちなみに罰ゲームは毎回変わりますので、次回からさらなる恐怖が待ち望んでいます……フフフ…（黒笑。
あと、グー〇ル先生やウィ〇に頼ってもいけません、頼ってしまったら罰ゲームを受けてもらいます（黒笑」

ゆっくりれいむ
「さぁ、一体正解を選んだ中で誰が離脱するか！誰が優勝するか？、答えは次回！。
勝てば天国！負ければ地獄！「ゆっくりれいむとゆっくりまりさのＴｈｅ☆クイズでしていってね！！！」を……」

ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ
「ゆっくり待っていってね！！！」

プロローグ&第1問（後書き）

ＰＬＬＬＬＬ！！！　ＰＥ！

デフォ子
「あ、もしもし？、モモ？。やっぱり、今回もダメだったよ。
あいつは話を聞きかないからな……そうだな、次はこの小説を読んでる皆にも付き合ってもらうよ」

ゆっくりまりさ
「つーか何で今回はエルシャ○イネタがあるんだ？。アレ確か売り上げがダメダメでサイトが閉鎖しｔ……」

ゆっくりれいむ
「おいやめろ！」

第1問の答え発表と解説・第2問（前書き）

ゆっくりれいむ
「前回までのあらすじ……私の偽者がアへ顔になりました、以上」

霊夢
「待てコラ（怒）」

第1問の答え発表と解説・第2問

ゆっくりれいむ
「全にじファンの読者の皆さまあはようございますこんにちはこんばんわ。
私、このクイズ小説の司会進行を務めさせていただきます、
楽園の素敵な饅頭でスーパーウルトラハイパープリティーキューティーラブリーキューピー饅頭、ゆっくりれいむと申します」

ゆっくりまりさ
「なげーよ！、つかキューピーはマヨネーズだろ！。
……失礼しました、このクイズ小説のアシスタントのゆっくりまりさだぜ」

ゆっくりれいむ
「今回からは、小説風ではなく台詞方針小説となります。
クイズ番組を見ている気分で楽しみにしてください、ちなみに一番注目すべきなのはこの私！。
ゆっくりれいむよ、さぁ！私を崇めなさい！崇め崇めて崇めまくるのよ！」

ゆっくりまりさ
「オイ！、第二回目からして読者の皆様に喧嘩売るような行いはやめろよ！。
不快になって評価が愕然と落ちるぞ！」

ゆっくりれいむ
「え？、何で？」

ゆっくりまりさ
「何だ知らないのか？、第1回目の時の総合評価は４ｐｔだったんだぜ？。
しかも、文章評価は無し。感想は2件だけ」

ゆっくりれいむ
「……え、えええええええええええええええええ！！？？（ガーーーーン。
え？ナニソレ？どういうこと？、メッセージは！？メッセージはないの？（青面」

ゆっくりまりさ
「残念ながら、メッセージも無かったぜ」

ゆっくりれいむ
「う…嘘よ！うそでしょ！？。私たちが待っていた読者は、私たちを裏切ったわけ！？」

ゆっくりまりさ
「安心しろ、別に読者様は裏切ってないがな。
こんな台詞方針で茶番が多いやおいな小説、誰も感想入れるわけが無いもんな」

ゆっくりれいむ
「や、やおい？……ま、まさか！、やおいって…！（照」

ゆっくりまりさ
「お前あんこの中腐ってるのか？、そっちの世界じゃなくて「ヤマなし・オチなし・意味なし」の省略形だ」

ゆっくりれいむ
「……ソウカ……ダカラダレモクイズニコタエテクレ……ナイノカ……（青面」

ゆっくりまりさ
「どうした？れいむ？」

バタッ

ゆっくりまりさ
「れいむ？、どうしたんだ？そんなところで寝ると風邪引くぞ。
れ、れいむ？…れいむ？……れいむうううう――――ッッ！！！」

――ただいま放送事故が発生したため、しばらくお待ちください――

――10分後……――

ゆっくりれいむ
「皆さま、先ほどは大変なご無礼をいたしました。
さて、先ほどのは黒歴史として……ここからクイズの答えを発表します」

ゆっくりまりさ
「また、クイズの答えには解説がございます故、お付き合い願いま

す」

ゆっくりれいむ
「それでは、クイズの答えをはっぴょういたします。
前回のクイズは、３人位が１番と答えました、さぁ！クイズの答えは……これだ！」

問題：
「きかんしゃトーマス」に登場するトーマスのモデルとなった機関車は実在するか？

？：実在する
？：実在しない
？：どちらでもない
？：五郎（機関車じゃありません）

正解：？：実在する

ゆっくりれいむ
「はい！、正解は１番の実在するでした！。
不正解者は居ません……チッ」

ゆっくりまりさ
「正解した方々、おめでとうございます！。
プレゼントに「ゆっくり名物　ゆっくり饅頭（を山葵風味）」を送りいたします……ただし、２個の饅頭に「サラマンドラの粉」が入ってます（悪笑。
では、ここで解説に入ります」

――デフォ子の解説コーナー――

デフォ子
「皆さま、はじめまして。ゆっくりの親戚である唄音ウタと言います。
今回からは、やるかやらないかの解説コーナーを担当することになりました。では、早速今回のクイズの答えである解説をします
さて、今回の解説はきかんしゃトーマスのモデル機関車となった「ロンドン・ブライトン・アンド・サウスコースト鉄道クラスＥ２蒸気機関車」についてです」

＊ＬＢ＆ａｍｐ；ＳＣＲ　Ｅ２クラス

ローソン・ビリントン氏によって製造されたサイドタンク機関車。トーマスのモデルとなったのも有名である。
この機関車の主な運用は貨物列車牽引機の担当である。

１９１３年から１９１４年にかけて５台が製造され、水の積載量を多くするためにタンクを改造。
そして１９１５年から１９１６年の間に、またもや５台の機関車が製造された。

さて、この後期型ことがあの悪戯好きで頑張り屋のトーマスのモデルとなった事から有名になった。
貨物用の後継機は、長距離の走行が難しいがために駅構内、操車場や港、造船所などの入れ替え作業用機関車として活躍していた。

トーマスが好きな皆さまならば、分かるかもしれません。

第１期初期では、トーマスは入れ替え専用の蒸気機関車だったのです。

……しかし、そんな機関車たちも終わりの時が迎えてしまった。
１９６０年代、ディーゼル機関車の登場、そして無煙化によって、彼らはお払い箱となった。
彼らの仕事を奪い取ったのは、イギリス国鉄クラス０７ディーゼル機関車と言う入れ替え専用のディーゼルだった。

そして１９６０年代の初めに、ついに全１０台の機関車がスクラップとなって姿を消した。
子供や大人たちからも愛されてる有名な機関車のモデル機関車は、一台も保存されずにこの世から消えてしまった。

ゆっくりまりさ
「……はい、解説通り。トーマスのモデル機関車は一台も保存されずにスクラップとなってしまいました。
皮肉な事に、彼らの仕事を奪ったイギリス国鉄クラス０７ディーゼル機関車は、
きかんしゃトーマス第６期に登場した造船所のディーゼル「ソルティー」のモデルとなったディーゼルです。
とても良いディーゼルなのに、実際はトーマスのモデル機関車を仕事を奪った挙句にスクラップにしてしまったと言うのは、悲しいことです」

ゆっくりれいむ
「うえええん！トーマスがかわいそうだよ！（涙）」

ゆっくりまりさ
「うん？」

ゆっくりれいむ
「だって……トーマスを残して全員スクラップにされたんだよ。
トーマスの兄弟たちはみんな鉄道のお偉いさん達に殺されたんだよ！……トーマスは一人ぼっちじゃない…（泣」

ゆっくりまりさ
「そうだな、確かにトーマスは兄弟も居なくなって独りぼっちだな。
だがな、トーマスにはいろんな仲間たちも居るし、自分を愛してくれる人たちもたくさんいるんだ。
あいつはそんなに一人ぼっちじゃないぜ、ほら泣くなれいむ。次の問題を出すぞ」

ゆっくりれいむ
「ぐすっ……うん（涙」

ゆっくりれいむ
「はい、次の問題へと入ります。
今回は第二問の2セットとなっております」

ゆっくりまりさ
「もちろん、罰ゲームは2種類あるぜ？……外れたら苦しく味わえよ」

ゆっくりれいむ

「では、今回の問題はこちらです」

１の問題：
「東方ｐｒｏｊｅｃｔ」に登場する紅魔館の主であり、カリスマの持ち主であるレミリア・スカーレットの種族は？

？：吸血鬼
？：幽霊族
？：人間
？：五郎（妖怪でも人間でもありません）

２の問題：
「Ｍｉｎｅｃｒａｆｔ」に登場する匠は？

？：ガスト
？：クリーパー
？：ゾンビ
？：五郎（匠じゃありません）

ゆっくりれいむ
「はい、今回はこの２セットの問題です。
まぁ、今回も感想は来ないけどね。では正解された方の中から「レミリア様から言ってほしい言葉」と「焼肉丼」をプレゼントいたします」

ゆっくりまりさ
「では、まず１の問題の罰ゲームは「フランの遊び相手」として地下牢に強制で行くことにされます。
そして２の問題の罰ゲームは「匠の強制リフォーム」をプレゼントいたします、絶望するのは誰か？。

どっちも外れたら罰ゲームでも容赦はしないぜ」

ゆっくりれいむ
「答えが分かったら、感想欄とメッセージに答えを書いてください。また、質問も募集しております」

ゆっくりまりさ
「さぁ、一体正解を選んだ中で誰が離脱するか！誰が優勝するか？、答えは次回！。
　勝てば天国！負ければ地獄！「ゆっくりれいむとゆっくりまりさのＴｈｅ☆クイズでしていってね！！！」を……」

ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ
「「ゆっくり待っていってね！！！」」

第1問の答え発表と解説・第2問（後書き）

ゆっくりれいむ
「ね、ねぇねぇ…デフォ子」

デフォ子
「何？」

ゆっくりれいむ
「あの約束、「カップヌー〇ルごはん」でいい？」

デフォ子
「私は白いお米しか食べない」

ゆっくりまりさ
「この期に及んでみっともないぜ、れいむ」

第2問の答え発表と解説・第3問（前書き）

重音テト
「うぅ～…今朝から何も食べてないからお腹が空いた…」

ゆっくりまりさ
「おや？テトじゃないか、こんなところで何してるんだぜ？」

テト
「あ、君はデフォこんの親戚の……実は、お腹がすいて動けないんだお。
何か買おうにも、レンタルＤＶＤの延滞料金で無くなっちゃったし…」

ゆっくりまりさ
「そうかそうか、なら私の顔をお食べ」

ブチィッ

テト
「うわっ！？」

ゆっくりまりさ
「安心しろ、私はれいむと違って美味いぜ。ほら、食え」

テト
「あ…ありがとう…（苦笑。モグモグ……ほんとだ！美味しい！ほっぺたがとろけそうだお！」

ゆっくりまりさ（顔半分）
「えー、顔の一部で締めて五万円となります」
テト
「えっ…！？（汗」

第2問の答え発表と解説・第3問

ゆっくりれいむ
「どうもおはようございますこんにちは、こんばんわ。
みんなのアイドルのゆっくりれいむです。この度、私らのクイズ小説は三回目を迎えました
……アレ？まりさはどこ行ったの？」

ガチャッ

ゆっくりまりさ（顔半分）
「いやー、悪い悪い。遅れちまったぜ」

ゆっくりれいむ
「うわあああああああああああああ！！（顔面蒼白。
ま、まりさ！…あんた、顔が半分になってるわよ！？怖い！キモイ！」

ゆっくりまりさ
「キモイは失礼だ！。あっ、半分になってるのはな、デフォ子の親友がお腹をすかせてたから、
私の顔を食べさせてやったんだ、時期に元に戻るから。ちなみに請求はちゃんとしたから」

ゆっくりれいむ
「あんた……本当に腹黒いわね」

ゆっくりまりさ
「まぁ、あんこなだけに。はいはい、つまらんダジャレは置いとい

て、ゲストを紹介します」

ゆっくりれいむ
「こ、今回のゲストは……紅魔館の主でもある、この方です！」

レミリア・スカーレット
「ククク……全にじファンの読者たち、御機嫌よう。
私はレミリア・スカーレット……私が来たからには、恐怖に変わることね」

十六夜　咲夜
「はじめまして、レミリアお嬢様に仕えるメイド長の十六夜　咲夜でございます。
以後、お見知りおきを…」

ゆっくりれいむ
「はい、今回のゲストは自称、カリスマの持ち主であるレミリアとメイド長の咲夜さんに来てもらいました！」

レミリア
「ちょっとゆっくり！、自称って何よ！？、自称って！」

ゆっくりれいむ
「だってあんた、昨日からカリスマブレイクしてたでしょ？」

レミリア
「私のどこがカリスマブレイクしてですって…？（ピキピキ」

咲夜
「お嬢様、お気を確かに…」

レミリア
「ふぅ…私としたことが、ちょっと混乱してしまったわ。
それより、早くクイズの発表をなさい？」

ゆっくりまりさ
「お前に言われるのはしゃくだが、まぁ時間無いからとっとと行くぜ」

ゆっくりれいむ
「はい、と言うわけでクイズの答えを発表します。
今回のクイズでは、なんと感想を書いてくれた人のオリキャラの回答を含めて……
六人が回答しました」

レミリア
「あら、オリキャラも含めるの？」

ゆっくりまりさ
「だってこの小説、あんま感想来ないし、メッセージも来ないからな」

ゆっくりれいむ
「コラ！メタ発言はやめろ！……ふぅ、ではクイズの答えは…これだ！」

１の問題：
「東方ｐｒｏｊｅｃｔ」に登場する紅魔館の主であり、

カリスマの持ち主であるレミリア・スカーレットの種族は？

？：吸血鬼
？：幽霊族
？：人間
？：五郎（妖怪でも人間でもありません）

正解：？：吸血鬼

2の問題：
「Ｍｉｎｅｃｒａｆｔ」に登場する匠は？

？：ガスト
？：クリーパー
？：ゾンビ
？：五郎（匠じゃありません）

正解：？：クリーパー

ゆっくりれいむ
「はい！一つ目の正解は、1番の吸血鬼、二つ目の問題は…2番のクリーパーでした！
不正解者は2人居ました、どちらもオリキャラですが……さぁ！恐怖の時間よ！（黒笑）」

ゆっくりまりさ
「正解した方には、「レミリア様から言ってほしい言葉」と「焼肉丼」を
プレゼントいたします。

不正解した2名様は、罰ゲームとして…「匠の強制リフォーム」と「フランの遊び相手」で地下室に強制連行しまーす！。
命を賭けたゲームがただいま開催されます！ゆっくりくるしんでいってね！！！（黒笑」

不正解した2名のうち一人は、黒い服を着た男性に掴まれて地下室に強制連行されていった。
そして、クリーパーが足音も立てずに強制リフォームをするためにターゲットに近づいて行った。

＞シュウウウゥゥゥゥゥゥ………BOOOOOOOOOOM！！！＜

＞ドガーン！！＜

ゆっくりれいむ
「ククク……見て！罰ゲームを味わってる人が悲鳴をあげてるわ……フヒヒ」

ゆっくりまりさ
「フハハハハハ！これだ！私らが求めていたのはこれだ！、さぁ苦しめ！」

レミリア
「（こうなってしまう運命はわかってはいたけど……
こいつらは本当に飼い主と違って腹黒いわね……）」

咲夜
「（あんこなだけにですか？）」

レミリア
「咲夜、今のは面白くなかったわよ」

咲夜
「……（照」

ゆっくりれいむ
「さて、次のプレゼントはレミリア。あんたに言ってほしい言葉よ」

レミリア
「私に？、カリスマの吸血鬼であるこの私に言って欲しい言葉なんて…いい度胸ね」

ゆっくりまりさ
「ほれ、ここに言ってほしい言葉をまとめたプレートがあるから、そこから選べ」

レミリア
「ふむ……ハッ！こんなの言いたくないわね、どれもこれもくだらないわ（ポイッ」

ゆっくりれいむ
「ちょっ…！、あんたに言ってほしい言葉だよ！？。言いたくないってどういうことなの？」

レミリア
「そうね、どれもこれも気に食わないことよ。1番気に食わないのがこれよ、
「咲夜を足蹴しながら『私の靴をお舐め』」という言葉。
咲夜にそんなことはしたくないわ、（小声）い…いつも咲夜には

お世話になってるし（照」

咲夜
「……お嬢様」

ゆっくりまりさ
「じゃあどうすんだ？」

レミリア
「私が読者たちを震え上がらせる恐怖の言葉を言うわ…ククク……
これを聞いて恐怖に溺れるがいいわ」

ゆっくりれいむ
「はいはい、じゃあどーぞ（棒読」

レミリア
「ぎゃおー☆たーべちゃーうぞー☆（笑顔」

ヒュウゥゥゥ……

ゆっくりれいむ
「……。」

ゆっくりまりさ
「……。」

咲夜
「……（鼻血＋プルプル震えながら俯いてる」プルプル

ゆっくりれいむ
「ぷっ……プッギャーーーーーーwww！！。
ナニソレw？ばかなの？どこが恐怖なのww？、へぇーwそれが恐怖ねーww」

レミリア
「なっ……！。こ、これが私の恐怖の名言よ！
それに私はどこぞの妖精と違ってバカじゃないわよ！！（赤面」

ゆっくりれいむ
「プププwwはっきり言うけど、あんたの発言はバカだよww、
おぉ怖い怖いwwカリスマがどこかに飛んでって子供になっちゃったねww。
ねぇねぇ？今どんな気持ち？恥ずかしい台詞行っちゃったけど、
ねぇどんな気持ち？wwねぇねぇ～ww」

レミリア
「う……（涙」プルプル

咲夜
「お、お嬢様……！」

ゆっくりまりさ
「お、おいれいむ！そろそろやめとけ！」

ゆっくりれいむ
「泣くの？ほら泣けば？、泣けば？」

レミリア（カリスマブレイク）
「うわあああああああああああああん！！（号泣」

ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ
『おぉっ！？』

レミリア（咲夜に抱きつく）
「違うもん！私はバカじゃないもん！私偉いもん！、カリスマだもん！わあああん！！。
さくやぁあああああ！！ゆっくりがいじめる～！、もうやだー！帰る～！お家帰る～！！（泣」

咲夜（鼻血ダラダラ）
「大丈夫ですよ、お嬢様……さぁ、帰りましょう（あぁ…お嬢様が私に抱きついて…」

ゆっくりまりさ
「えー、ここでゲストが帰りたいと要望してきましたので。
ゲストには帰っていただきます、今日は忙しい中…ありがとうございました」

レミリア
「ふえぇぇ……バカじゃない！私、バカじゃないよね？（涙目」

咲夜
「はい、お嬢様。私は分かっています、お嬢様はバカでないことを…
私は分かっていますよ（なでなで」

ゆっくりまりさ
「あーあ……れいむのせいで、ゲストが泣きながら帰っちまった。
どうしてくれるんだ？親善大使殿」

ゆっくりれいむ
「わ、私のせい？……ち、違う！俺は悪くねぇっ！俺は悪くねぇっ！」

ゆっくりまりさ
「いや、お前のせいだろ。後で謝っとけよ？親善大使殿」

ゆっくりれいむ
「その呼び方はやめて！！、えぇい！もうめんどい！解説に移るわよ！。
デーフォ子ー！解説お願い！」

ゆっくりまりさ
「今回は報酬、０になるかもな。親善大使殿」

ゆっくりれいむ
「だから！その呼び方はやめて！」

――デフォ子の解説コーナー――

デフォ子
「はい、皆さま。解説コーナー担当の唄音ウタです。
何やらゆっくりが問題を起こしたみたいだけど、気にせず解説に参ります。
今回は、クリーパーの解説をいたします」

＊クリーパー

Ｍｉｎｅｃｒａｆｔと言うサンドボックス型のものづくりゲームに登場するモンスター。
外見は緑色でまだら模様に見えるデザインと、
ボーッとしてぽっかり空いた口がある顔なのが特徴。
腕が無く、小さい脚が前後に一対ずつ生えている。

こいつの攻撃方法はユーザーの皆様方にとっては苦痛である。
プレイヤーを発見すると一定距離まで近づいてきて、
「シュー」と導火線に火が付いたような音を立てて自爆する厄介なやつである。
近づかれたら最後、洞窟に居る時には背後から音も立てずに近づいてきて、
「シュー」という音に気付いた時には爆死されている。
しかも、この爆発をまともに受けてしまったら即死である。

他の動物やモンスターとは違って呻き声を発しない為、
死角から近づかれると気づくことができず、
着火音を聞いたと思ったらプレイヤーはすでに爆死しているというケースが非常に多い。
だが、このキャラクターでも倒すと火薬を落とすので、必要なモンスターである。

倒すには、弓矢で攻撃、一歩近づいて剣で攻撃して爆発しない半径５ブロック以内まで逃げることが必要。
何故、匠と呼ばれるか?、それはプレイヤーが拠点とする家を丹精込めてやっと完成したところに

クリーパーが現れ、爆発と共に家を強制リフォームしてくる。
その犠牲にチェストの中にあったアイテムをばら撒かれ、
またはアイテムを消し飛ばされ、多くのプレイヤーを悲しみのどん底に突き落とした。

そして、ユーザーの数々はこう言う。

「なんということをしてくれたんでしょう」

しかし、その恐怖の姿とは裏腹に、愛くるしい姿が良く見られるのでＭｉｎｅｃｒａｆｔで
人気が高いキャラクターである。
可愛い顔してババンバンとはまさにこのこと。

ゆっくりまりさ
「はい、解説により、匠ことクリーパーの紹介でした。
追記しますと、クリーパーの誕生は豚の失敗作から生まれたモンスター。
また、Ｂｅｔａ１．５では雷に打たれることにより強化されたクリーパーが目撃されます、
この雷を受けたパワーアップした匠を「巨匠」と呼ばれます」

ゆっくりれいむ
「まりさ、クリーパーってパワーアップするとどうなるの？」

ゆっくりまりさ
「爆発範囲が広くなる、まぁ即死だけどな。

なんか、プレイヤーの中では巨匠を見たい！と言う人が多くて、
雨の日に探しだす人が多々あるらしい」

ゆっくりれいむ
「そういえば、私も霊夢にこっそり隠れてＭｉｎｅｃｒａｆｔをやったけど、
夜になってクリーパーにリフォームされたよ…（泣」

ゆっくりまりさ
「松明は置いたか？」

ゆっくりれいむ
「あ……置いてない」

ゆっくりまりさ
「松明置かなかったから、リフォームされるのは当たり前だ。じゃあ、次の問題に参ります」

ゆっくりれいむ
「はい、次の問題へと入ります。
今回も第３問は２セットとなっております」

ゆっくりまりさ
「正解者には天国、不正解者には地獄を味わう罰ゲームがあるぜ…フフフ」

ゆっくりれいむ
「では、今回の問題はこちらです」

1の問題：
「戦え！超ロボット生命体トランスフォーマー」に登場する
破壊大帝メガトロン率いるデストロン軍団の？2は？

？：サウンドウェーブ
？：レーザーウェーブ
？：スタースクリーム
？：五郎（トランスフォーマーじゃありません）

2の問題：
「きかんしゃトーマス」に登場するトーマスの支線の終点の駅の名前は？

？：ナップフォード
？：ティッドマウス
？：ファークァー
？：五郎（駅名ではありません）

ゆっくりれいむ
「はい、この2セットの問題です。
正解された方の中から「セイバートロン星生産のエネルゴンキューブ」と
「ソドー鉄道のチケット」をプレゼントいたします」

ゆっくりまりさ
「さて、毎度おなじみの罰ゲームです。
まず1の問題の罰ゲームは「クインテッサ星人の裁判ごっこ」
としてクインテッサ星人の惑星に強制連行します。
2の問題の罰ゲームは「幽香と弾幕ごっこ」をプレゼントいたし

ます、
絶望するのは誰か？。
どっちも外れたら罰ゲームでも容赦はしないぜ」

ゆっくりれいむ
「答えが分かったら、感想欄とメッセージに答えを書いてください。
また、質問も募集しております」

ゆっくりまりさ
「さぁ、一体正解を選んだ中で誰が離脱するか！誰が優勝するか？、答えは次回！。
勝てば天国！負ければ地獄！
「ゆっくりれいむとゆっくりまりさのＴｈｅ☆クイズでしていってね！！！」を……」

ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ
「「ゆっくり待っていってね！！！」」

第2問の答え発表と解説・第3問（後書き）

―フランとゆっくりふらんのＵＮ質問コーナー！―

ゆっくりふらん
「うー☆みんな元気にしてたー？、今回からこのコーナーに設置されるようになった質問コーナーだよ☆。
このコーナーはゆっくりふらんと……」

フラン
「フランドール・スカーレットがお送りするよー！」

ゆっくりふらん
「うー☆じゃあ初めの質問だよ☆」

フラン
「えーっと、ＵＮネーム「白米さん」からの質問。
「そちらの早苗とにとりはロボットに興味ありますか？」はい、じゃあ緑色の髪の巫女のお姉ちゃんと河童に答えてもらうよ」

早苗
『ロボットですか？、はい、もちろん興味ありますよ。
中でも一番、興味を持つのが変形するロボット『トランスフォーマー』に興味を持っています。
私が中でも一番好きなのは何と言ってもコンボイ司令官ですよ！だってマスクがかっこｎ……。
ところでアルバートさん、トランスフォームできますか？』

にとり

『え？ロボット？、興味あるかなー？
一度解体して、構造がどうなってるか調べてみたいんだ。ところで、アルバートだっけ？一度、私の所においでよ
大丈夫、河童の技術は世界一だから、解体してもすぐ直すよ☆』

ゆっくりふらん
「うー☆……なんか、恐ろしいこと言ってるけど」

フラン
「私もアルバートと早く遊びたーい！弾幕ごっこしたいよー！」

ゆっくりふらん
「と言うわけで、質問コーナーはおわりだよ☆」

フラン
「えっ……終わりなの？私たちの出番、コレデオシマイ？」

ソドー鉄
「フラン落ち着いて！、質問があればまた出番あるから！」

フラン
「ウソジャナイヨネ？、ウソダッタラ……コワシチャウヨ？」

ソドー鉄
「嘘じゃないから、それとスタジオを壊したら、ゆっくりふらんと出番はあげないよ」

フラン・ゆっくりふらん
「えっ……うぅ（涙目」

ソドー鉄
「（や、やばっ！）だ、大丈夫だから！、出番はあるからね！、だかな泣かないで！…ねっ、ねっ？」

フラン・ゆっくりふらん
「じゃあとって……」

ソドー鉄
「え？」

フラン・ゆっくりふらん
「あくたがわしょー取ってぇ！（泣」

ソドー鉄
「日常！？」

フラン・ゆっくりふらん
「あくたがわしょー！あくたがわしょー！」

彼女たちの為に質問、募集してます　BYソドー鉄

休止のお知らせ（前書き）

デュラ娘
「…フフフ……今回からこの小説は…「惨殺！デュラ娘！」を連載します……
みなさん、絶対読んで…」

ゆっくりまりさ
「うおおおおい！？、何で勝手にタイトル変えてんだよ！？
つか、そのタイトルパクリだろ！」

デュラ娘
「……この小説を侵略するデュラ…イカの奴には負けないデュラよ……」

ゆっくりまりさ
「今さら語尾付けんなァァァ！！対抗心燃やすなァァァ！！！！」

休止のお知らせ

＜謝罪会見＞

パシャッ　パシャッ　パシャッ

ゆっくりまりさ
「皆さま。本日はお集まりいただきありがとうございます。
今回、クイズ小説の放送を一時的休止せざる得ないことを深くお詫び申し上げます」

デフォ子
「今回で第４問となるはずですが、
司会者がとんでもないことになってしまった故に今回の放送はお休みさせていただきます」

記者Ａ
「司会のゆっくりさんに、どのようなアクシデントが起こったのですか？」

デフォ子
「はい、彼女のアクシデントについては、ゆっくりまりさの方から説明させていただきます」

ゆっくりまりさ
「と言うわけで、私が説明するぜ。
えー、司会のれいむは……ただのお饅頭になりました」

記者Ｂ

「え？……ただのお饅頭に？」

ゆっくりまりさ
「はい、お饅頭になりました。もはやただの饅頭です」

記者Ａ
「えええ！？ただのお饅頭になったら……この小説はどうなるのですか！？」

ゆっくりまりさ
「この小説の方は大丈夫です。れいむが元に戻り次第に小説を再開させていただきます。
今回の所は元に戻るまでにお休みさせていただきます」

記者Ａ
「作者様の本心は？」

ゆっくりまりさ
「「トーマス小説を完結させたいから、しばらく休止しようかな？。あと、ネタが無い」
と言うことです」

記者Ｂ
「つまり作者様の気分次第ということですか？」

デフォ子
「そういうことです。ゆっくりの件についてですが……明後日ぐらいには元に戻ります」

ゆっくりまりさ

「と言うことで、本日からは「
ゆっくりれいむとゆっくりまりさのＴｈｅ☆クイズでしていってね！！！」は……
ちょっとだけお休みさせていただきます。バカ作者の気分次第で多分早く連載しますが……」

デフォ子
「今回はお時間をいただき、誠にありがとうございました（ペコリ」

休止のお知らせ（後書き）

ゆっくりまりさ
「全く……
せっかく答えを回答してくれた皆様に失礼すぎるだろ……。
あのバカ作者……」

デフォ子
「まぁいいじゃないか。たまには休みと言うのもありだよ」

ゆっくりまりさ
「そうだな、私もちょっと休みを取って帰るとするか」

デフォ子
「あぁ～モモが炊いたあったかいご飯が食べたい…。
ところで一つ聞いていい？」

ゆっくりまりさ
「なんだ？」

デフォ子
「ゆっくりはどうする？」

饅頭（ゆっくりれいむ＋タッパーに入れられてる）
「……。」

ゆっくりまりさ
「私が連れて帰るぜ。
多分、この小説が更新したら元に戻ってるから」

デフォ子
「なら安心だ」

第3問の答え発表と解説・第4問（前書き）

ゆっくりれいむ
「うぅ……墓地に来たけど、やっぱり一人は怖い…
まりさもつれてくればよかった……」

???
「ちーかよーるなー！」

ゆっくりれいむ
「え?、何何々?…ま、まままさか幽霊!?
ふ、ふーははははは!!この私と戦おうってのか?いいだろ!相手になって……」

宮古芳香
「これから先はお前達が入って良い場所ではない！」

ゆっくりれいむ
「ぎゃあああああああああああ!!!（青面」

芳香
「ややっ！首が飛んでいる…そうか！お前もキョンシーだなー！……誰だっけ?」

ゆっくりれいむ
「……（チーン」

第３問の答え発表と解説・第４問

ゆっくりれいむ
「皆様、おはこんばんちわ。ゆっくりれいむです」

ゆっくりまりさ
「どうも、アシスタントのゆっくりまりさです」

ゆっくりれいむ
「前回、勝手な休止になってしまったことをお詫び申し上げます」

ゆっくりまりさ
「いやぁ、れいむがただの饅頭に戻ったときはパニックたからなぁ。
つか、お前邪念ありすぎだろ……」

ゆっくりれいむ
「邪念があるからこそ人間だ！（キリッ」

ゆっくりまりさ
「いや、かっこよくないから……と言うわけで、今回のゲストをご紹介します。
なんと！この小説初の他小説からのゲストです！」

ゆっくりれいむ
「ご紹介します！ゲストは白米さんの小説「東方双界伝　～Another Fantastic World.」からのゲスト！
エルフのマリア・リュミエールさんです！！どうぞ拍手を～！」

ワーパチパチパチ！！

マリア
「み、みなさんこんにちは……げ、ゲストのマリア・リュミエールです！」

ゆっくりまりさ
「ずいぶん緊張してるな……」

マリア
「く、クイズ小説に出るのは初めてです…えっと……えっと…どうぞよろしくお願いしますッッ！！（照」

ゆっくりれいむ
「マリア、マリア」

マリア
「ひゃっひゃい！」

ゆっくりれいむ
「深呼吸して、落ち着いて」

マリア
「はい……スーハー…スーハー」

ゆっくりれいむ
「はい、ひっひっふー」

マリア
「ひっひっふー…」

ゆっくりまりさ
「いやいや、それ出産に使う呼吸法だろ……」

マリア
「なんとか落ち着きました。ゆっくりさん、ありがとうございます
（キラキラ」

ゆっくりれいむ
「！……ま、ま…」

マリア
「？」

ゆっくりれいむ
「マリアァァァァ！！（涎だらだら」

マリア
「ひっ！」

ゆっくりれいむ（変態モード・オン）
「ハァハァ…マリアたんかわいいよおおおおおお！！その柔らかい胸で私を包んでぇぇぇぇぇぇ！！」

ふにゅん

マリア
「ひゃん！／／／」

ゆっくりまりさ

「オイれいむ！ゲストに触れるな！」

ゆっくりれいむ
「ハァハァ…な、なんて感触なんだ…固くもなくこの感触…」

マリア
「や、やめてくださいぃ…／／／」

ゆっくりまりさ
「やめいっつってんだろーがァァ！！（激怒）」

――放送事故が発生したため、しばらくお待ちください。――

十分後……。

ゆっくりまりさ（返り血だらけ）
「えー…皆様、れいむのアホがマリアに手出ししたため、お仕置きをいたしました。
すまないな、アホが迷惑をかけて」

マリア
「い、いえ…私は気にしていませんよ（苦笑）」

ゆっくりれいむ（包帯）
「まぁ、本人もこう言ってるんだし、ゆるしてくれよ」

ゆっくりまりさ
「お前は反省しろよ。えー、今回は援護のロボット軍団の皆様もゲストに来られるのだったのですが…」

ゆっくりれいむ
「詳しい事情はマリアからどうぞ」

マリア
「はい…実は、この小説にゲストに出る前にグリムさんから援護付きでゲストに出るようにと言われたのですが……
そうしたらグリムさんの作ったロボットさん達が原因不明の故障を起こしてしまったらしく、私一人でゲストに出ることになりました」

ゆっくりれいむ
「いやー、災難だったねぇ～～。原因不明の故障となると、修理が大変だね～（棒読」

ゆっくりまりさ
「原因不明の故障の原因はお前じゃねーか」

マリア
「ふぇ？」

ゆっくりれいむ
「では、尺の関係があるので、さっさとクイズの答えを発表します」

ゆっくりまりさ
「次の感想でグリムが切れてる姿が見えるが…とりあえずクイズの発表だぜ」

マリア
「……（ドキドキ」

ゆっくりれいむ
「はい、と言うわけで答えの発表です。
今回もオリキャラを含めて合計7人が答えてくれました」

ゆっくりまりさ
「マリア、ファイナルアンサー？」

マリア
「ふぁ……ファイナルアンサーです！」

ゆっくりれいむ
「さぁ、クイズの答えは……これだ！」

1の問題：
「戦え！超ロボット生命体トランスフォーマー」に登場する破壊大帝メガトロン率いるデストロン軍団の？2は？

？：サウンドウェーブ
？：レーザーウェーブ
？：スタースクリーム
？：五郎（トランスフォーマーじゃありません）

答え：？

2の問題：
「きかんしゃトーマス」に登場するトーマスの支線の終点の駅の名前は？

？：ナップフォード
？：ティッドマウス
？：ファークァー
？：五郎（駅名ではありません）

答え：？

ゆっくりれいむ
「はい、一つ目の正解は、３番目のスタースクリーム。二つ目の問題は…３番のファークァー駅でした！」

マリア
「や、やったぁ！！」

ゆっくりまりさ
「おめでとうございます！。マリアさん１問目大正解！。
しかし、全員が１問目で正解とは…」

マリア
「スタースクリームさんの噂はこちらにも聞いていますので…」

ゆっくりまりさ
「まぁ、あいついろんな意味でバカだしな。と言うわけで１問目の正解者には…
「セイバートロン星生産のエネルゴンキューブ」を差し上げます。
はい、マリア」

ゆっくりまりさがマリアにエネルゴンキューブを渡す。

マリア
「わぁ…綺麗…ありがとうございます！（キラキラ」

ゆっくりれいむ
「ハァハァ…」

ゆっくりまりさ
「れいむ、襲うなよ？。さて、2門目は正解者が2人…不正解者が5人です。
正解者には、「ソドー鉄道チケット」をプレゼントいたします」

ゆっくりれいむ
「フフフ……さぁ、罰ゲームの時間よ！」

マリア
「（そ、そういえば私……2門目は2番って答えちゃった――ッッ！！）」

ゆっくりれいむ
「…と、言いたいけど、今回はマリアは抜き」

マリア
「へっ…？（涙目」

ゆっくりれいむ
「だってマリアは、大事なゲストだし、そんな顔されちゃかわいそうで出来るわけ無いでしょ？。
だから特別にマリアは罰ゲーム無しだよ」

マリア

「そ、そうですか…でも…」

ゆっくりれいむ
「大丈夫大丈夫。幽香には、手加減するようにって頼んだから」

マリア
「それなら、安心ですね」

しかし、マリアは知らなかった……幽香の手加減と言うのは、どんなに恐ろしいことかというのを…。

ゆっくりまりさ
「その代わり、はい」ペラ

マリア
「何ですか、この紙…」

ゆっくりまりさ
「えー、刃様が私の顔半分を食しましたので、顔の半分で締めて五万円となります」

マリア
「ふえええええ!?、何故私がですか!?（涙目」

ゆっくりまりさ
「いや、あいつに請求したかったけど食い逃げされちまってな、代わりにあんたに払わせようと思ったんだぜ（黒笑」

マリア
「（刃さああああああああん!!!）うぅ～…わ、わかりました

…ぐすっ」

ゆっくりまりさ
「期限は一週間だから、それまでに払わなきゃ文に恥ずかしい写真をばら撒かせるからな」

ゆっくりれいむ
「悪魔め…！」

ゆっくりまりさ
「悪魔で……いいよ」

マリア
「うぅぅぅ～（涙目」

マリアは、このコンビの傍若無人に何も答えれなかった。

ゆっくりまりさ
「さて、不正解者は罰ゲームを受けてもらいます、幽香との弾幕ごっこを楽しんでくださいね（黒笑」

ゆっくりれいむ
「では、デフォ子～解説お願い！」

――デフォ子の解説コーナー――

デフォ子
「はい、皆さま。解説コーナー担当の唄音ウタです。
今回は2門目の答えについて解説させていただきます」

＊ファークァー駅

きかんしゃトーマスに登場するトーマスの支線の終点の駅。
名前だけではどの駅なのかだと分からない人も多い。
第1期～第7期のＯＰの最後にトーマスが駅に停車するシーンがあるが……
実はこの駅こそ終点のファークァー駅である。

また、トーマスの支線の運行はナップフォードからドライオー、トリレック、エルズブリッジ、ハッケンベックを経由し、ファークァーまで運行する。
ファークァーの終点は石切り場である。

尚、主な運用は旅客列車とファークァーの石切り場から砕石を運び出す貨物列車なのだ。

ゆっくりまりさ
「はい、以上を持ちまして、ファークァー駅の解説でした。
この駅は名前だけだと分からないけど、ＯＰを見ると「あ、あの駅か～」と思い出すこともあります。
トーマス、トビーが主な運用を担当し、パーシーがナップフォードの港貨物などを担当、ディーゼル車のデイジーが単位の旅客輸送となっております」

ゆっくりれいむ
「へぇ～知らなかった…」

マリア
「そこまで細かい設定があったんですね……」

ゆっくりまりさ
「まぁ、主が盗んできた本の中にソドー島の歴史本があったからな。
ちなみに外の世界だと、この本は１０万円ぐらいするほど手に入れないらしい」

ゆっくりれいむ
「ええええええ！？何でそんなに高いの！？」

マリア
「じゅっ……１０万！？」

ゆっくりまりさ
「この本、結構古くて絶版物だからな…そりゃ高いぜ」

マリア
「（慧音さんが欲しがっていた本って、もしかしてこれなのかな？）」

ゆっくりれいむ
「くぅぅ今のくそ制作会社はケチだから、再販は無理ね……」

ＰＬＬＬ！！

ゆっくりれいむ
「おっ…電話だ。はいもしもし、ゆっくりです…え？、あーはい。
あの件ですね？

はい、今からお知らせします。えー……皆様にお伝えします
次回から、クイズに不正解した人は連帯責任として全員で罰ゲームを受ける方針になりました」

ゆっくりまりさ・マリア
『……』

ええええええええええええええええええええええええええええええええ
ええええええ
ええええええええええええええええええええええええええええええ
！！！？？？？

ゆっくりまりさ
「どういうことだよ！連帯責任なんて聞いてないぞ！」

マリア
「どういうことですか！？説明してください！」

ゆっくりれいむ
「どういう意味って？、昨日会議で決まったよ？
まりさ、あんた知らなかったの？」

ゆっくりまりさ
「知るわけねーだろ！知ってるんなら私にも教えろよ！。つか、何で早く言わないんだ！？」

ゆっくりれいむ
「ふぅ……君達はいつもそうだね」

ゆっくりまりさ

「な、何！？」

マリア
「ふぇ？」

ゆっくりれいむ
「真実をありのままに伝えると、決まって同じ反応をする……

わ け が わ か ら な い よ w w w w w」

ガスッ！　ガスッ！　ガスッ！　グジャッ！

ゆっくりれいむ
「……（ピクピク」

ゆっくりまりさ（返り血まみれ）
「はい、ということでバカはほっといて……次の問題に入ります」

マリア
「ガタガタガタガタ……（青面」

ゆっくりまりさ

「というわけで、次の問題となります。
今回も2門セットとなっております、正解者には天国、不正解者は地獄を味わう罰ゲームがあるぜ……。
では、今回の問題はこれです」

1の問題：
アニメ版「星のカービィ」に登場するデデデ大王はドクター・エスカルゴンに対してなんて言いましたか？

例：
デデデ
「殻？……殻と言えば……
お前のそれも×××××××！」

エスカルゴン
「ギクゥ！！」

？：お前のそれもカラカ＝ゾーイ！
？：環境破壊は気持ちいいＺＯＹ☆
？：歴史はスタジオで作られる～
？：五郎（台詞じゃありません）

2の問題：
「きかんしゃトーマス」に登場するゴードンの弟機関車の名前は？

？：フライング・スコッツマン
？：ベアー
？：スペンサー
？：五郎（機関車ではありません）

ゆっくりまりさ
「はい、今回の問題はこの2セットです。
正解された方の中から、「サザエ」一か月分と「フライング・スコッツマンの生写真」をプレゼントいたします。
そして1の問題の罰ゲームは「ホラー映画鑑賞」
として連続ホラー映画を見させます。
2の問題の罰ゲームは「ゴキブリ鑑賞」としてゴキブリの居る部屋に連行と言うのをプレゼントいたします、
絶望するのは誰か?。
どっちも外れたら罰ゲームでも容赦はしないぜ」

マリア
「（今回も罰ゲームが絶望的ですよぉぉぉ!!!）」

ゆっくりれいむ
「答えが分かったら、感想欄とメッセージに答えを書いてください。
また、質問も募集しております」

マリア
「きゃっ!。ゆっくりさん…いつの間に…」

ゆっくりれいむ
「饅頭だから復活は早いのよ」

マリア
「そ、そうなのですか……」

ゆっくりまりさ
「はい、と言うことで終了の時間がやってまいりました。

今回のゲストは白米さんの小説「　東方双界伝　～　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｆａｎｔａｓｔｉｃ　Ｗｏｒｌｄ．」
から来てくださったマリア・リュミエールさんでした。どうでしたか？」

マリア
「はい、ちょっと怖かったですが、結構面白くて楽しかったです！。
次回も楽しみにしています（キラキラ」

ゆっくりまりさ
「純粋すぎるぜこの娘……純粋すぎて泣けるよ。
今日はゲスト出演、ありがとうございました」

マリア
「いえ、こちらもありがとうございました」

ゆっくりれいむ
「さぁ、一体正解を選んだ中で誰が離脱するか！誰が優勝するか？、答えは次回！。
勝てば天国！負ければ地獄！
「ゆっくりれいむとゆっくりまりさのＴｈｅ☆クイズでしていってね！！！」を……」

ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ
「「ゆっくり待っていってね！！！」」

第３問の答え発表と解説・第４問（後書き）

―フランとゆっくりふらんのＵＮ質問コーナー！―

ゆっくりふらん
「うー☆みんなお久しぶり～ゆっくりふらんだよ～！」

フラン
「みんな～！元気にしてたー！フランは元気だよー！」

ゆっくりふらん
「うー☆フランちゃん！早速質問行こうよ！」

フラン
「行こう！行こう～！。まずＵＮネーム「さだっち」さんからの質問。
『上司に何かいいたいことありますか！？（そこの発言は責任は各自でお取り下さい）』だって」

ゆっくりふらん
「うー☆。質問の答えは他の人たちが答えたくないと言っているので、美鈴と咲夜に答えてもらうよ！」

咲夜
『お嬢様に何か言いたいことですか？……特にありませんが…
ピーマンとグリーンピースを食べてくれなくて困っているのです、体に栄養を付けなくては心配で心配で…』

美鈴

『え？言いたいことですか？。いえ、私は門番をしているので…あの、咲夜さん』

咲夜
『ナ　ニ　カ　シ　ラ　？（ギロッ』

美鈴
『ひぃぃ！！な、なんでもありません……とほほ（涙目』

ゆっくりふらん
「咲夜が怖いよー！」

フラン
「お姉さま…ピーマンとグリーンピース食べれないなんて……プププッw子供。
　はい、次の質問に行くよ！、UNネーム「白米」さんのオリキャラ三人からの質問」

刃「美鈴に質問だ。紅魔館の庭師を兼ねているそうだが、庭の手入れをしている間は門番はどうなっている？」

勇「チルノちゃんに質問。メッセージで返り討ちされて以来、兄さんと刃の印象は？」

アルバート「霊夢、魔理沙、早苗、咲夜、鈴仙、そして妖夢に質問だ。マリア」

マリア「え、はい。…ニコ」

アルバート「マリアの笑顔を見てどんな反応をする？邪念があれば

浄化されるぞ」

フラン
「じゃあ、また美鈴から答えてもらうよ。美鈴～！」

美鈴
『庭の手入れをしている間はゆっくりれみりゃ様が代わりにしてもらっています。
あ、咲夜さんとレミリアお嬢様からはちゃんと許可はもらってますよ』

ゆっくりふらん
「そういえばお姉ちゃん、この前「独り立ちする為に働く」って言ってたみたいだけど…」

フラン
「フランも独り立ちしたい。じゃあ次はチルノ！」

チルノ
『あたい、あいつらのことなんかだいっきらい！！いつかたおしてやる！
なんたってあたいはさいきょーなんだから！』

フラン
「私も鬼のお兄さんと忍者さんと弾幕ごっこしたいな、また会えないかな～？。
次の質問は、霊夢たちに答えてもらうよ！みんなの反応は？」

霊夢

『へぇ～……で？』

魔理沙
『笑顔が眩しすぎるぜ！』

早苗
『ま、負けない！』

咲夜
『あら、可愛い笑顔ですね。でも、うちのお嬢様のほうが（略』

鈴仙
『女神様～～～！！どうかその笑顔で姫様をまじめに…（涙』

妖夢
『す、すみません！今、夕食を作っていますので…』

幽々子
『よ～む～！ご～は～ん～！！』

デュラ娘
『ごっはっん♪ごっはっん♪』

妖夢
『は、はいただいま！』

てゐ
『の〝お〝お〝お〝お〝お〝！！や、やめるウサ！そんな笑顔で私を見るなウサァァ！！
浄化されるウサァァァァァ！！！』

輝夜
『いやあああああああああ！！そんな笑顔で私を見ないでぇぇぇぇぇ！！』

フラン
「約二名、浄化されちゃったね…」

ゆっくりふらん
「うん……」

フラン
「と言うわけで、今回の質問はおしまい！次回も質問は募集してるよ！」

ゆっくりふらん
「うー☆！みんな、またね～！」

フラン
「ねぇねぇ、ふらふら～！おやつの時間だから食べに行こう！」

ゆっくりふらん
「わーい☆行こう行こう～！」

フラン・ゆっくりふらん
「さ～～くや～～！おやつ～！」

おしまい。

その頃の幻想卿では（前書き）

ゆっくりたちがクイズをやっている、その頃の幻想卿です。
今回は私のオリキャラが登場します。

苦手な人は読まないことをお勧めします。

その頃の幻想卿では

「まったく……ゆっくりはいつもいつも……」

縁側で愚痴を呟いているのは、ゆっくりれいむの主である霊夢だ。
それもそのはず、普段ならのほほんと茶を啜っているのだが……
いつもに増して不機嫌である。

「まぁ、お前に似てるいからじゃないか？」

そしてその愚痴を聞いているのは、ゆっくりまりさの主である普通のこそ泥
……じゃねーや、普通の魔法使いの霧雨魔理沙だった。

「オイ、誰がこそ泥だよ？」

すいません、つい……。

「誰に話してるのよ？」
「気にするな！」

いきなり独り言を言う魔理沙に対して呆れた顔をしながらいう霊夢だが、気を取り戻して愚痴が続いた。
愚痴の内容は、もちろんゆっくりれいむに対する愚痴だった。
彼女は霊夢が戸棚にしまったおいた高級な饅頭が変化した妖怪であるが……性格と表情は違えど見かけからして霊夢そっくりである。
いつものように魔理沙はその愚痴を軽がると「はいはい」と返事をする。

だが、霊夢の愚痴はまだ収まらなかった。

「掃除はサボるわ、着替えを覗くわスカートをめくるわ！。
いくら楽園の素敵な巫女でも我慢の限界ってものがあるわよ！おかげで参拝客が来ない……」

「いや、参拝客が来ないのはゆっくりのせいじゃないぜ……（汗」

最後の愚痴に関しては魔理沙の言うとおりゆっくりれいむとは関係が無い。

参拝客が来ないのは、ここ博麗神社は幻想郷の最東に建てられているからだ、周囲には妖怪が出る森なので…行こうにも行けれない。

だが霊夢の人間・妖怪問わずに惹きつける性格にも参拝客が来ない理由もある。

そのおかげで博麗神社には全く、里の人間の人っ子一人は来ない……来るとしても妖怪や賽銭箱に石ころや蛙の死骸を入れる悪戯好きな妖精だけだ。

更に最悪なことには、自分の顔をした妖怪饅頭「ゆっくりれいむ」が居候してしまったことで霊夢の悩みは増えるばかり……。

「あぁ……あんなに美味しい美味しいお饅頭が…三日間でゆっくりに変化したのよ?。

とっても高いお饅頭なのよ……あんこがとろっとしてて頬っぺたが落ちそうなぐらいだったのに〜〜〜……」

そう言って霊夢は泣きながら魔理沙を揺すった。

未だに饅頭の味を忘れられないらしい。

魔理沙は揺すられながら、「まだ饅頭のことを嘆いてたのか…」と心の中で呟いた。

ちなみに、彼女の家にも自分の顔をした妖怪大福のゆっくりまりさが居候している。
あまり普通の味だったので、魔理沙は食べ残したまま二日で変化した妖怪である。
……と、その時である。

「号外で～す！」

声とともに少女は新聞をばら撒き、霊夢たちのところへ急降下した。

「おはようございます。清く正しい命射丸です、今日の号外です」

そう言うと少女……他の妖怪よりもプライドが高いとも言われる鴉天狗の一人の射命丸文は敬礼しながら名乗って霊夢に文々。新聞を渡す。

霊夢は新聞を受け取ると早速記事を読んだ。

「えーと何々、『衝撃！幻想卿に新たな訪問者！』……また外来人が来たって事？」
「はい、どうやら今度は人間の少女っぽい人なんです」
「っぽいって何だよ……」

新聞を読んで、また外来人が来たと思うと霊夢はため息を吐く。
ここ最近、外の世界から幻想卿にやってくる者が数多くあった。

去年はソドー鉄道一号機関車のトーマスがこの幻想卿にやってきてしまったことがあるからだ。
だけど、なんとか彼は無事にソドー鉄道へと帰っていったが、今

度は誰が来るのか…いや、誰が連れてこられるかわからない。
というより、ここ最近は人間ではなく人外系ばっかだった。

ゆっくりれいむだけでもイライラしているのに外来人が来たのにもイライラする。
新聞を読み終えた霊夢は折りたたんで、テーブルに置いた。
普段なら読み終えたらゴミ箱に投げ捨てるのだが、これを見た文は魔理沙はありえない表情で見ていた。

「お、おい霊夢！お前どうしたんだ！？」
「は？何がよ？」
「あやや！？霊夢さんにしては珍しいですよ！？、新聞を捨てることに定評のある霊夢さんが！」
「どんな定評よ！！、この新聞はゆっくりが読みたいからとっておくだけよ！」
「アレ？ゆっくりさん、まだ帰ってこないんですか？」

文はゆっくりれいむの事を聞くと霊夢は縦にうなずいた。
この文々。新聞を楽しみにしているのは紅魔館の主であるようじょ……じゃなかった、吸血鬼レミリア・スカーレットとゆっくり達であった。
特にすごく楽しみにしているのはゆっくりれいむである、文々。新聞を購読のしているはゆっくりれいむ一人だけ。

料金もゆっくりれいむが払っている、外の世界で実況しているのでへそくりをどこかに隠しているからである。

「ったく、私に黙って購読なんて居候の分際で何考えてるのよ」
「まぁいいじゃないですか。こうして購読してくれる人が居ますし…」

「それはあんたにとってはでしょ……それにゆっくりは人じゃないでしょ」

そう突っ込むと霊夢は「あ～あ」となだれ込む。

ちなみに文とレミリアのところにもゆっくりが居る……しかしこちらは饅頭ではなく肉まんやあんまん、ピザまんが変化したものである。

「でも、なんかかんやでゆっくりと仲いいじゃん」

そう言いながら霊夢の隣で酒を飲んでいたのは上級妖怪の鬼の幼女……違う違う、少女……小さな百鬼夜行の伊吹萃香だった。

「なぁ！、す、萃香！？」

これには霊夢は頬を赤くして動揺する。

そんな鬼の発言に敏感に聞いた文と魔理沙は質問をする。

「ほほぉ、ゆっくりさんと仲がいいのですか……」

「萃香、私にも詳しく聞かしてくれ！」

「そうだねぇ～～……最近、ゆっくりの奴が帰ってこないときに「早く帰ってこないかな」と心配していたし……

寝言で「ゆっくり～」と言ってて……」

「わーわーわー！！！」

鬼は嘘が嫌いなので正直に話す、霊夢は顔を真っ赤にして両耳を塞ぎながら叫び続けた。

こんな霊夢の姿を見るのははじめてなので、文はこっそり写真を撮った。

萃香の話を聞いて霊夢を見ながらニヤニヤする魔理沙。

「ちち、違うのよ！ご飯が冷めちゃうからそう言ってるだけよ！それにあいつが居ないと枕代わりが……」

霊夢は動揺しているのか何を言ってるか自分でさえわからなくなってしまった。

「おぉ、ツンデレツンデレ」

「ツンデレ言うなー！！」

とどめにウザい顔をしながら文が言うと、霊夢は顔を更に赤くしながら怒鳴った。

もう湯気がもわもわと出ている。

「でもね～、ゆっくりだって霊夢や神社のことを思って参拝客が来るように努力しているよ」

「萃香ァ！あんたもいい加減に……って、えっ？」

もう一度怒鳴ろうとしたが、ゆっくりが神社のためにがんばっているという事を聞いてピタッと止まった。

更に萃香は話し続ける。

「あいつは結構、怠けているけど、ちゃんとこの神社や霊夢の事を思っているんだよ。

私が屋根の上で昼寝していたときに、ゆっくりが参拝客を連れてきてるのを見たんだよ」

「ほほぅ、私達の見えないところでそんなことをしていたんですね」

「ゆっくりって結構働き者だな～……あ、そういえばこの前の話だが…」

今度は魔理沙が話し始めた。

その話は魔理沙がいつもの様に紅魔館に侵入し、大図書館から本を強奪した後に神社の石段を登っているときだった。
彼女は、森の中で何やら怒鳴り声が聞こえてきたので、様子を見てみると……。

「アレはゆっくりじゃん、って何だあの妖怪共？」

森の中では、ゆっくりれいむが2匹のとても大柄でごつい妖怪たちと話していた。
だが、何やら様子が変だった、ゆっくりれいむが何か怒っているのだ、もしや戦うのか？と魔理沙は首を傾げたが……。

「この……バカッ！！！」

一人の妖怪を殴った。
あんなにごつい妖怪がいとも簡単に小さいゆっくりれいむに殴り倒されたのはありえないが、
彼女は霊夢のそのものそっくりなので能力も強さもちょっとアレンジしてあって強いのである。
殴り倒した妖怪の胸倉を掴んでまだ怒鳴っていた。

「アレほど参拝客には手を出しちゃだめって言ったでしょうが！」
「す、すんませんゆっくりさん。俺……どうしても子供らに飯食わせたかったんですよ……」
「私がキノコ料理を作ってあげるわよ！。別にあんたが退治されても私はどうでもいいのよ」

そう言ってゆっくりれいむは妖怪を突き放した。
どうやら、この妖怪は自分の子の為に参拝客を襲ったのである。
それを見た毛玉から聞いたゆっくりれいむは怒っていたのだ。

神社の信仰、霊夢の事で思いやりがある為、それが許せなかった。
そして居場所を突き止め、今の現状に至るのであった。
妖怪はただ黙って見つめていたが、ゆっくりれいむは悲しそうな顔をして、その妖怪にこう言った。

「でもね……あんたが紅白の巫女に退治されたら、誰があんたの子供の面倒を見るのよ？」
「お、俺がバカでした…グスッ」
「ゆっくりさんは誰よりもお前やお前の家族のことを心配してんだぞ！」

「（……盛り上がってる…）」

なんか某不良高校漫画みたいな流れであるが、魔理沙は気にすることも無かった。
しかし、ゆっくりれいむの意外な行動を見てちょっと驚いていた模様だった。

「……と、まぁ、そんなことがあったんだぜ」
「あややや！貴重な意見、ありがとうございます。
次の記事はコレですね！「ゆっくりれいむ！博麗神社の参拝客を助ける！」と……」

そう言って魔理沙の話は終わった。

早速、パパラッチは文花帳を取り出し、その事について書いていた。
霊夢はと言うとちょっとだけ微笑んでいた、普段は怠けて掃除サボって、着替えを覗いて、腋を舐めたり
スカートをめくったりしているばかりのゆっくりれいむが神社のために参拝客を増やしていることを……
最近になって思えば、以前よりは参拝客が来るようになった。

ゆっくりれいむはただの疫病神ではなく、本当は幸せを運ぶ妖怪と思い始めた。

「（…ったく、余計なお世話ばかり…）」

……が、次の萃香の一言でこの思いは崩れ始める。

「でもね～、参拝客の中にはスタイル抜群の女性にセクハラしていたりもしたのもあったな～」
「……。」

オーケー、前言撤回。
やっぱあのアホ饅頭は疫病神よ！！。

霊夢は心のそこからそう呟いた。
自分で参拝客を減らすような行いをしているゆっくりれいむにかなりの怒りのオーラを出していた。
これを見て、魔理沙たちは若干、顔面蒼白になって霊夢から一歩引いた。

その時、石段から、人影が見えた。
人のようだった、しかし……参拝客にしてはどうもおかしかった。

両手に担いでいるのは、大きなたらいだった。しかも息切れしていてハァハァと喘いでいる。

「なぁ、アレって……まさか」

魔理沙が呟いたその瞬間、霊夢は真っ先にその人影まで走っていった。

「オイ！霊夢！待て！、あいつは！」

いきなり走り出した霊夢に魔理沙は止めようとしたが、時すでに遅し。

何故、走り出したのか不明であったが、文はぽつりと呟いた。

「おそらく霊夢さん、あのたらいの中にたっぷりとお賽銭を入れるお金があると勘違いしたのじゃないでしょうか？」

「あー、最近、お賽銭を入れる人少ないからね」

文の呆れた一言に、萃香は同情した。

一方、霊夢はと言うと、猛スピードで走って、その人物の目の前で止まった。

すると、顔を上げると満面名笑顔で……

「ようこそ！博麗神社へ……」

ザバァァァ！！

何かをぶっかけられた、それも赤い液体である。

ぶっかけられた霊夢は何をされたのかポツンと佇んでいた。

一見、血に見えたが、ほんのり甘い香りがしているのでトマトジ

ュースだった。

魔理沙達も霊夢に近づいてそのぶっかけた人物を見た。

さらさらしていて綺麗な青色のロングの髪で、単発ズボンで柄の入った服を着ていて。

顔はかなり可愛い分類に入っている、目は赤と緑のオッドアイ、スタイルはかなり良く、胸は西行寺幽々子、八雲紫、八雲藍には負けるが中ぐらいである。

文はカメラを持って撮り続け、萃香はその少女の胸をじぃっと見ていた。

そして魔理沙は驚きを隠せずに口をパクパクしていた。

若干、たらいを持っているただの少女であるが、人間とは思えないところがあった。

少女の首が、ちょっとだけぐらついたのである。

ぐらぐらする頭を少女はあわてて押さえた。

「お、お前まさか……死を呼ぶあの…」

魔理沙がそう言おうとした時に、霊夢からかなりの殺気が出ているのに気づいた。

そこには、ワナワナと怒りと殺意が入った鬼巫女の姿があった。

ゆっくりれいむの傍若無人やセクハラ行動、そして中々来ない参拝客、更にはたらいにいっぱい入ったトマトジュースをいきなりぶっかけられる……

などと霊夢の顔がかなり怖い表情になっていた。

こんな姿の霊夢はかなり初めてである、魔理沙たちはあわわわわ

…と震え上がり、霊夢から離れた。
ぶっかけた少女もかなり震えていた。
次第に、ワナワナと震えていた霊夢は口を開いた。
「ねぇ、あんた……」
「ヒッ……！」
霊夢に声をかけられ、少女は更に震える。
「この博麗の巫女であるこの私に、トマトジュースをぶちまけるとは……いい度胸しているじゃない？」
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……
もう今にも爆発しそうな霊夢に、魔理沙たちは何も声をかけれない。
否、声をかけられなかった、声をかけたら自分たちまで殺しそうなぐらい恐怖が正に霊夢から出ているのだ。
少女は、何かハッとして、霊夢にこう言った
「……ご」
「ご？」
「……ごめんなソーリー…」
その瞬間、博麗の巫女が鬼巫女に変化し、綺麗な弾幕が頭がぐらつく少女に浴びさせられた。
お空には、綺麗にぶっ飛ぶ少女の姿が……。
……それが、デュラハンの見習い少女デュラ娘と、霊夢たちのフ

ァーストコンタクトであった。

その頃の幻想卿では（後書き）

ソドー鉄
「本当は書かないつもりでしたけど、長く書いちゃいました」

霊夢
「ちょっと！何なのよあの娘は！？、
いきなりトマトジュースぶちまけられてひどい目にあったわ！」

ソドー鉄
「紹介します。あの娘は私のオリキャラの一人である
デュラハンの見習いのデュラ娘です。
紫さんが連れてきたと言う設定で登場させました」

霊夢
「やっぱり元凶はあんたか！」

紫
「あら、いいじゃない♪。結構面白いのよ？、あの娘」

霊夢
「ゆっくりの次に首が取れる娘…頭痛い」

ソドー鉄
「ちなみに白米さんの小説にも登場します」

霊夢
「どうせトマトジュースをぶちまけてるんでしょ？」

ソドー鉄
「いえいえ、彼女はちゃんっとした理由でゲスト出演しています」

紫
「それで、クイズの答えは？」

ソドー鉄
「すいません、もう片方の小説を更新するまで待ってください（汗」

霊夢
「ところで大丈夫なの？、幻想卿のことは知られちゃいけないんでしょ？」

紫
「それならご安心を……ゆっくりたちがやっているクイズ、外の世界では放送してないから」

ソドー鉄
「さすがゆかりん……また次回！。
ちなみにデュラハンはああ見えて妖精らしいですよ」

霊夢
「えっ…？アレで妖精！？」

第４問の答え……と、思いきや（前書き）

小傘
「うぅ……今日で三日目……誰も驚いてくれない（泣」

ガサガサッ

小傘
「ハッ！誰か来た……うらめしや～！驚け～！」

デュラ娘（頭だけ）
「……あーれー……」　コロコロ…

小傘
「ぎゃあああああああああああああああ！！！（涙目」

第４問の答え……と、思いきや

ゆっくりれいむ
「皆様、グッモーニンエブリワン！ゆっくりれいむです。
今回、いよいよ第４回目となりました、それではクイズのほうへと……」

ゆっくりまりさ
「れいむー、れいむー」

ゆっくりれいむ
「あっまりさ！、どこに行ってたの？」

ゆっくりまりさ
「さっきプロデューサーから呼ばれてな……あっそうそう、お前に良いニュースと悪いニュースがあるが
どっちから聞く？」

ゆっくりれいむ
「うーん…悪いのは後から聞くとして、良いニュースから聞こうかな？。
良いニュースって何？」

ゆっくりまりさ
「フフフ、聞いて驚け！。ついにこの番組が総合評価２６ｐｔ！ＰＶアクセス合計１，７５７アクセスになったぞ！
更にお気に入り登録数は６件だぜ！」

ゆっくりれいむ

「き、キターーーーーーーーー！！！やった！やった！
ついにこの番組も多くの読者に評価されるようになったんだね！、
それもそのはず！
このビューティーセクシーエロチック楽園の素敵な饅頭の私を崇めたこそが評価されるの！
さぁ、読者共よ！もっと私を崇めなさい！ほら？早く早く！……」

ゆっくりまりさ
「またそうやると視聴率が愕然と落ちるぞ……そうそう、悪いニュースになるが
今日はまた休止だとよ」

……シーン。

ゆっくりれいむ
「え？」

ゆっくりまりさ
「だから、今日は休止だとよ」

ゆっくりれいむ
「……う、嘘でしょ――――――！？（青面」

ゆっくりまりさ
「紛れも無い事実だぜ」

ゆっくりれいむ
「何でまた休止？、まさかまたあのバカ作者がネタ切れとか言うの？あ？、ふざけんなあのバカ作者！
帰ったら絶対にぶっ殺して皮をはがして敷物にしてやるわ！！（

殺意」

ゆっくりまりさ
「いちいち発想が怖いなお前、今回は違うんだぜ。
まぁ、今回は読者の皆様にお知らせするから、落ち着くんだぜ」

ゆっくりまりさ
「えー、皆様。本日は当番組をご視聴いただきありがとうございます。
今日の放送は休止となります、理由は野球の中継が延長となった故に休止せざるおえませんでした」

ゆっくりれいむ
「野球かよ！延長戦になるとこうやっていつも番組が休止しないといけないのかよ！」

ゆっくりまりさ
「まぁ仕方ないぜ、野球を楽しみにしている人も沢山いるからな。
と言う事で、今日の放送は休止となります」

ゆっくりれいむ
「うぅ……今回の放送を楽しみにしていた読者様、本当に申し訳ありませんでした」

ゆっくりまりさ
「と言うわけで、今回の問題を残して放送を終わります」

１の問題：

アニメ版「星のカービィ」に登場する
デデデ大王はドクター・エスカルゴンに対してなんて言いましたか？

例：
デデデ
「殻？……殻と言えば……
お前のそれも×××××××！」

エスカルゴン
「ギクゥ！！」

？：お前のそれもカラカ＝ゾーイ！
？：環境破壊は気持ちいいＺＯＹ☆
？：歴史はスタジオで作られる～
？：五郎（台詞じゃありません）

２の問題：
「きかんしゃトーマス」に登場するゴードンの弟機関車の名前は？

？：フライング・スコッツマン
？：ベアー
？：スペンサー
？：五郎（機関車ではありません）

ゆっくりまりさ
「はい、今回の問題はこの２セットです。
正解された方の中から、「サザエ」一か月分と「フライング・スコッツマンの生写真」をプレゼントいたします。
そして１の問題の罰ゲームは「ホラー映画鑑賞」

として連続ホラー映画を見させます。
２の問題の罰ゲームは「ゴキブリ鑑賞」としてゴキブリの居る部屋に連行と言うのをプレゼントいたします、
絶望するのは誰か？。
どっちも外れたら罰ゲームでも容赦はしないぜ」

ゆっくりれいむ
「放送休止となりましたが、次回からはちゃんと放送しますのでご安心ください」

ゆっくりまりさ
「さぁ、一体正解を選んだ中で誰が離脱するか！誰が優勝するか？、答えは次回！。
勝てば天国！負ければ地獄！
「ゆっくりれいむとゆっくりまりさのＴｈｅ☆クイズでしていってね！！！」を……」

ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ
「「ゆっくり待っていってね！！！」」

第４問の答え……と、思いきや（後書き）

ゆっくりれいむ
「ちくしょー……野球め、絶対に許早苗」

デフォ子
「まぁまぁゆっくり、こんなときもあるさ。
たまには息抜きと言うのもありだよ」

ゆっくりれいむ
「私は読者が罰ゲームで苦しみもがいて
悲鳴をあげる姿がみたかったのに！」

ゆっくりまりさ
「確かに名残惜しいぜ、まぁ次回で多数生き残れるか分からんが
読者（生贄）が増えるだけマシだぜ」

ゆっくりれいむ
「フフフ……それもそうね…」

デフォ子
「君達って相変わらず腹黒い……そんなことよりごはん食べたい」

第４問の答え発表と第５問（前書き）

ゆっくりまりさ
「れいむ！力襷（ちからだすき）じゃ！」

ゆっくりれいむ
「おぉ！これさえあれば１０万デストロン力！！！」

……プチッ。

……襷があっても無理だろ。

第４問の答え発表と第５問

ゆっくりれいむ
「皆様、グッドナイト。
クイズの司会者、ゆっくりれいむです」

ゆっくりまりさ
「アシスタントのゆっくりまりさだぜ」

ゆっくりれいむ
「癒しを求めクイズを求める皆様に癒しを与えるこの番組も、今回で第五回目を迎えました。
感想も徐々に増えてきましたし……」

ゆっくりまりさ
「いや、まだ１４件じゃないか」

ゆっくりれいむ
「プププ、バカだねまりさはw。こんなに感想が来る事なんて無いのよ？
それに、この小説って結構人気なんだよ、無論！この私！ゆっくりれいむのおかげなのよ！
いずれはこの小説をにじファンの頂点にさせるわ！！（キリッ」

ゆっくりまりさ
「あー、それなんだがな……実は…」

ゆっくりれいむ
「何よ？」

ゆっくりまりさ
「いや、うちのバカ作者が連載している「きかんしゃトーマスとなかまたち ～Ｔｈｏｍａｓ Ｔｈｅ Ｔａｎｋ Ｅｎｇｉｎｅ～」がな、ユニークが５５アクセスになったそうな」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

ゆっくりれいむ
「……え？」

ゆっくりれいむ
「だから、トーマスの方が５５アクセスを迎えたんだぜ」

ゆっくりれいむ
「…マジで？」

ゆっくりれいむ
「マジだぜ。」

ゆっくりれいむ
「……え、えええええええええええええええええ！！？。
ななんで！？なんでトーマスなの！？、５５アクセス！？どうして！？（青面」

ゆっくりまりさ
「どういうこともなにも、バカ作者は別の名前で呟く所で宣伝したらしいぜ？。
そうしたらアクセスを調べてみると、ユニーク５５人も観覧してくれたみたいだぜ」

ゆっくりれいむ
「あ、あのバカ作者！何でよりにもよってトーマスなの！？
こっちも宣伝しなさいよ！」

ゆっくりまりさ
「はい、ここに作者の手紙があります」

「いやー、マジでびっくりしました；。
まさか呟くサイトで宣伝してみたら、ユニークが５５人という
ありえない数字でしたよ。
でも相変わらず感想が来ない……やっぱりトーマスが好きな人
って少ないのかな？」

ゆっくりれいむ
「これただの愚痴文じゃねーかァ！！くそ！あの○○○作者！収録
終わったら
あいつの○○を○○○して○○○○○にしてやる！！
あと○○○○を蹴りあげて○○○○××××！！！（放送禁止
用語炸裂」

ゆっくりまりさ
「はいはい、時間も押してるからクイズの答えを発表するぜ」

ゆっくりれいむ
「ちょっと！まだ怒鳴り足りないわよ！！おいコラ！勝手に進める
な！
私を無視するなーーーーーーーッッッ！！（激怒」

―――――――――――――1時間後―――――――――――――

ゆっくりまりさ
「えー、皆様。
先ほどは失礼な姿をお見せしてしまいましたことをお詫び申し上げます。
さて、いよいよ待ちかねた第４問の答え発表です」

ゆっくりれいむ
「今回もオリキャラを含めて、１２人が答えてくれました。
た だ し 外 れ た ら 連 帯 責 任 だ よ ？」

ゆっくりまりさ
「さぁ、クイズの答えは……これだ！」

１の問題：
アニメ版「星のカービィ」に登場する
デデデ大王はドクター・エスカルゴンに対してなんて言いましたか？

答：
デデデ
「殻？……殻と言えば……
お前のそれもカラカ＝ゾーイ！」

エスカルゴン
「ギクゥ！！」

？：お前のそれもカラカ＝ゾーイ！
？：環境破壊は気持ちいいＺＯＹ☆

？：歴史はスタジオで作られる～
？：五郎（台詞じゃありません）

正解：
？：お前のそれもカラカ＝ゾーイ！

２の問題：
「きかんしゃトーマス」に登場するゴードンの弟機関車の名前は？

？：フライング・スコッツマン
？：ベアー
？：スペンサー
？：五郎（機関車ではありません）

正解：
？：フライング・スコッツマン

ゆっくりまりさ
「はい、１問目の正解は一番！２門目の答えも１番です！」

ゆっくりれいむ
「今回も、１２人のうち３人が外れてしまいました……
くけけけけけけ！！、では、外れたら正解者も含めて罰ゲームよ！（黒笑）」

観客
「えええええええええええええええええーーーー！？」

ゆっくりまりさ
「私らは確かに連帯責任とは言ったぜ、だがな……」

１チームだけ連帯責任とは、言ってないぜ？

ゆっくりまりさ
「さぁ、お待ちかねの罰ゲームだぜ。
今回の罰ゲームは１の問題の罰ゲームは「ホラー映画鑑賞」
として連続ホラー映画を見させます。
２の問題の罰ゲームは「ゴキブリ鑑賞」としてゴキブリの居る部屋に連行と言うのをプレゼントいたします。
それでは、チームに分かれて、罰ゲーム部屋に入ってください……さぁ、存分に恐怖を味わえ！！！（黒笑」

不正解した者達は、黒服の男たちに連れられて罰ゲーム部屋に強制連行されたが、
一人か怖がって逃げるも……スケルトンの弓矢でなんとか仕留めて強制連行した。
そして……二つの部屋では……

ぎゃあああああああああああ！！
ゴキブリいやあああああああああ！！　ほげぇえええ！！テケテケ怖い！
貞子怖い貞子怖い貞子怖い貞子怖い……
うぎゃあああああこっちに飛んできたー！！　いやあああああああああああ！！ムカデがあああああ！！

ゆっくりれいむ
「ふーはははははは！！良い…！良い悲鳴だわ！そうよ！そのままもだえ苦しめ！！（黒笑」

ゆっくりまりさ
「いやー、ホラー映画を見せる部屋に大量のゴキブリを準備しておいてよかったぜ。
中にはでかいムカデ１０匹もいるからなｗｗ（黒笑」

ゆっくりれいむ
「はい、今回はこの悲鳴のオンパレードをＢＧＭにデフォ子に解説をさせます。
デフォ子！解説お願い～！」

――デフォ子の解説コーナー――

デフォ子
「ゲホッ！ゲホッ！……あ、あぁ皆様…こ、こんにち…はくちッ！
す、すみません…今日は不覚にも風邪ひいてしまいまして…ゴホッ！ゴホッ！
申し訳ありませんが、今回は休みまず…は、は、はっ……はーっくちい！ちしくょー！！。
モ、モモ～…おかゆ…」

ゆっくりれいむ
「あら、デフォ子風邪ひいちゃったのか……うーむ、これは仕方ないわね」

ゆっくりまりさ
「どうも今朝から様子がおかしいと思ったら、風邪だったのか……
まぁ、無理せず休めよ。風邪の時はライフガードを飲んどけ」

ゆっくりれいむ

「というか、ロボットって風邪ひくの？」

ゆっくりまりさ
「こまけぇこたぁいいんだよ！」

ゆっくりれいむ
「では、今日は次の問題へと行きます」

ゆっくりれいむ
「はい、次の問題へと入ります。
今回も第5問も2セットとなっております」

ゆっくりまりさ
「正解者には天国、不正解者には連帯責任で正解者含めて全員、地獄を味わう罰ゲームがあるぜ…フフフ」

ゆっくりれいむ
「では、今回の問題はこちらです」

1の問題：
「きかんしゃトーマス」の原作「汽車のえほん」に登場する登山鉄道の名前は？

？：カルディー・フェル登山鉄道
？：ロード・ハリー登山鉄道
？：ソドー登山鉄道
？：五郎（登山鉄道じゃありません）

２の問題：
「きかんしゃトーマス」に登場する
ソドー鉄道８号機関車ダックの本名は

？：モンタギュー
？：ドナルド・ハハッ☆！
？：ジョニー
？：五郎（名前ではありません）

ゆっくりれいむ
「はい、この２セットの問題です。
正解された方の中から「ソドー鉄道のチケット」と
「フィッシュ＆チップス」をプレゼントいたします」

ゆっくりまりさ
「さて、毎度おなじみの罰ゲームです。
まず１の問題の罰ゲームは「自分の恥ずかしい思い出を語る」
として自分が思いっきり恥ずかしい思い出を語ります。
２の問題の罰ゲームは「クリーパーの住処」をご案内いたします、
絶望するのは誰か？。
どっちも外れたら罰ゲームでも容赦はしないぜ、というか一人で
も外れたら正解者も罰ゲームだぜ（黒笑」

ゆっくりれいむ
「答えが分かったら、感想欄とメッセージに答えを書いてください。
また、質問も募集しております」

ゆっくりまりさ
「さぁ、一体正解を選んだ中で誰が離脱するか！誰が優勝するか？、
答えは次回！。

勝てば天国！負ければ地獄！

「ゆっくりれいむとゆっくりまりさのＴｈｅ☆クイズでしていってね！！！」を……」

ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ

「「ゆっくり待っていってね！！！」」

第４問の答え発表と第５問（後書き）

ゆっくりれいむ
「アレ？今日は質問コーナーないの？」

フラン
「ふらふら（ゆっくれふらんの愛称）が風邪ひいたから、
質問コーナーはおやすみだよ？」

ゆっくりまりさ
「こりゃ困ったな…こっちは解説のデフォ子が
風邪ひいちまったし…どうする？」

ゆっくりれいむ
「じゃあ、予告でもしますか……
次回はクイズではなく、デュラ娘のお話です。
次回からゆゆみょんとの出会いとデュラ娘
と言う名前を名づけられた話です」

ゆっくりまりさ
「まぁ、小説書いたら感想来なかったけどな…
それじゃあ、２人の風邪が治り次第、
解説と質問コーナーは復活するぜ。
そして次回から蒼星石がレギュラーに入るから、
楽しみにしてくれよな。また来いよ！」

フラン
「まったね～～～☆！」

惨殺！デュラ娘　～幽々子と妖夢との出会い～（前書き）

ゆっくりれいむ
「どうも、ゆっくりれいむです。
今回はクイズではなく、デュラ娘のお話です。
デュラ娘のあらすじ」

デュラハンが飛びました。

ゆっくりれいむ
「以上です」

霊夢
「ちゃんと説明しなさいよ」

惨殺！デュラ娘　～幽々子と妖夢との出会い～

＞ザッ……ザッ……＜

白玉楼の庭で、箒を掃いてる音が聞こえる。
落ち葉を掃除しているのは、銀髪で緑の服を着ている少女であった。
彼女の名前は「魂魄　妖夢」、白玉楼に住む主「西行寺　幽々子」の庭師でもあり、護衛役兼剣術指南役ある。

だが、彼女は人間であるが……人とはちょっと違う。
それは周りにふわふわ飛んでいるお餅みたいなのは幽霊だ、妖夢は半分が人間、半分が幽霊のハーフである。
この様に人間と幽霊のハーフの事を「半人半霊」と呼ぶ。

また、腰には長刀「楼観剣」と、短刀「白楼剣」を帯刀している。

「ふぅ……ここの掃除はこれぐらいかな？」

掃除を終えると、妖夢は一息を吹いた。
……が、そう思っていたのもつかの間…また落ち葉が散っている。

「はぁ……」

これにはため息をつきたくなるが、再び落ち葉の掃除を始める。
誰でも経験したことがあるだろう、いくら庭掃除をしていても、すぐに枯れ葉が落ちて……
何回も何回もやってもキリが無いのだ。

掃除しているときに、ふと彼女は空を見上げる。
すっかり、夏の暑い空が終わり……秋の終わりも近づいてきている。

「今年はグッと冷え込むのかしら？」

空を見上げ、冷たい風を浴びながらそう呟いた。
こんな寒い日には暖かいものが食べたくなるのだが、妖夢はそんな主の事を想像しながら微笑む。

「（今夜の夕食は鍋物にしようかな）」

そして、掃除を終えて夕食の準備に取り掛かろうと屋敷に戻ろうとしたとき……。

＞ドッゴーーーーン！！！！＜

「みょんっ！？」

いきなり背後から何かが落ちた音に奇声を上げる妖夢。
ちなみにこの「みょん」が、一部のファンからは「みょん」と呼ばれる由来であった。
え？、そんなの関係ないから進めろこのどスケベ野郎って？……はいすいません。

「な、何？。さっきの音……後ろから？」

音に反応して妖夢は後ろを振り向くと……そこに居たのは砂埃が舞っていてよく見えない。
侵入者か？と考え、帯刀してあった「楼観剣」を抜き構えながら

様子を見る。

……やがて砂埃が晴れ、妖夢はその落ちた場所を確認した。
すると、そこには一人の少女が目を回して倒れていた。
少女の姿はひどいやけど傷を負っていて服装もぼろぼろだった…
…コラそこ、いやらしい想像しない！。

「ひ、人！？」

目を丸くして驚く妖夢。
だが、人間ならば人間の気配があるのだが……彼女からは人間の気配ではなく、妖精の気配だった。
だが、何故この少女はこんなにボロボロになっているのか…？、妖夢は気になりながらも少女に駆け寄り、起こそうとした。

「大丈夫ですか？、しっかりして……」

そう言って、妖夢は彼女を持ち上げると……

ポロッ　ゴツン

「…デュラ…」

首が落ちた、もう一度言う……首がポロリと落ちた。
それもいとも簡単に首が取れたのだ、しかも取れた首からは血がドロドロと流れ出ていない。
血の代わりに、首の根元から黒い煙がモクモクと吹き出ていた。

「……。」

サーーーーッ……

それを目撃してしまった妖夢の顔から血の気が引いて青ざめた。
実は妖夢は半分が幽霊なのに…お化けや怪談話が苦手である。
あろうことか、あのゆっくりにも怖がる（本人はゆっくりれいむの嘘で生首だと思っている）始末であった。

でもそんなところがみょんの可愛いところである……みょんかわいいよみょん、かわいいぜ…。
おっと、失礼しました。話がずれてしまいました。
少女の首がポロリと落ちたのを間近で目撃した妖夢は……

「く、首…首首ががが……（クラッ」

ドサッ

思わず気絶してしまった。

気を失ってから、何時間はたったのだろうか?。
そう思いながら少女――――デュラ娘は目を開けた。

「…ん……ここは…?」

目を開けるとそこは、どこかの建物の中だった。
どうやら誰かに運ばれて、建物の中に入れてくれたのだろう。
デュラ娘は起き上がる、しかも布団まで敷いてくれていたのだ。

「……広い……」

＞スーーッ＜

「失礼します」

辺りを見回すと、結構広かった、和の空間を持つ部屋にしてはちょっと広い。

その時、ふすまを開ける音とともに妖夢がお茶を乗せたお盆を持って入ってきた。

「気が付きましたか？」

「……。」

妖夢の問いかけにデュラ娘はコクコクと頷く。

「そうですか…」と妖夢はちょっと安心して、淹れたお茶を彼女に差し出す。

デュラ娘は湯飲みを受け取って、お茶を美味しそうにすする。

「……美味しい…こんなに美味しい…お茶を飲んだの…はじめて……」

「いえ、普通に淹れたお茶なので……でも、びっくりしました。いきなり人が落ちてきたかと思いましたので…」

いやいや、彼女の首が取れたところを見て気絶したあんたが言うか！。

若干、妖夢はデュラ娘をまだ人間として見ている、首が取れることを現実逃避しているとか絶対に言ってはいけない。

「…？……私…人間じゃないよ？……」

人と言う言葉に反応したか、デュラ娘は首をかしげて人間と言うのを否定した。
だが、妖夢はちょっと乾いた笑いをしながらデュラ娘の回答を否定し続ける。
何度も説明しているのに問うの妖夢は、いまだに否定し続ける。
全然信じてくれないのにプクーッと頬を膨らませたデュラ娘は、一旦湯飲みを置いて自分の頭を掴み……

＞スポッ＜

自分の首を取った。首なしニックですか？……いいえ、デュラハンです。
信じてくれないのならば、自分の特徴を見せて信じ込ませよう！と言うデュラ娘の意地であった。

「…これでも……私を人間だと思う？……」

首を手に持ったまま妖夢に見せる。
さて、当の妖夢はと言うと……

「見えない見えない見えない見えない見えない見えない……（涙目」

涙を流しながらデュラ娘からそっぽを向いていた。誰だって首が取れるのを見たらそれはそれで怖い。
全然見てくれないのにムッとして、更に首をグッと近づけさせるが……
涙目でプルプルと震えている妖夢には全然通じず、ただ泣いているだけであった。

さすがにかわいそうになってきたか、デュラ娘は自分の首を身体

にくっつけた。
まだ震えている、妖夢に思いっきり謝った。
「……ごめんなさい」
普段の彼女ならば、ここで寒いギャグを言う癖があるが……
霊夢に吹っ飛ばされたのを学習して、今回はキチンと謝った。
こんなに怖がらせるのはデュラ娘にとっては一番したくないことなのだ、デュラ娘の表情は曇りつつ、泣きそうになる……
……ところだった。

ムギュッ

「ひゃっ！！」
「だめじゃない、人の庭師を怖がらせちゃ」

突如、デュラ娘の背後から美しく色っぽい声とともにいつの間にか羽衣のような服を着た女性が現れ、抱きついてきた。
これには思わずデュラ娘は声を上げる、
しかし女性――――白玉楼の主にして西行寺家のお嬢様……西行寺　幽々子は抱きついたまま、デュラ娘の耳の近くにまで声をかける。

「あら、意外と可愛い声出すわね。しかも抱き心地も良いし……このまま食べちゃいたい」
「ふぇっ！？／／／／」

何をとち狂ったのか、幽々子がデュラ娘に抱きつきながらそんなことを言ってきた。
自分が抱き疲れるのはものすごく恥ずかしいデュラ娘だが、食べ

られるの意味を理解して顔を真っ赤にする。
このまま百合で甘々なエロ展開になるのか？と思う人も居るが……そんなことはなかった。

今までずっと顔を背けていた妖夢が我に帰って、幽々子がデュラ娘にちょっかい出しているのを見て止めたのだ。

「幽々子様！何やってるのですか！？」
「うふふ…冗談よ冗談」
「全く……」

幽々子はクスクスと笑いながらデュラ娘から離れて、扇子を開いてパタパタ扇ぐ
もう慣れたのか、妖夢は呆れながら言って、顔を真っ赤にしてるデュラ娘を宥めた。
声は出なかったが、デュラ娘はまたもや縦に頷いた。

「妖夢」
「は、はい」

そんな中、幽々子は真剣な表情で妖夢に声をかける。
妖夢はすぐに反応をするが、幽々子はジッと真剣な表情で妖夢を見つめるだけだ。
デュラ娘を屋敷に入れたのがまずかったのか？と考えるが……予想は遥かに崩れた。

「お腹すいた〜、ご飯作って〜」

ズコー

さっきまでのカリスマはどこへやら、のほほんとした表情でそう答えた。

これにはさすがの妖夢もズッコけた。

「あぁ、やっぱりいつもの幽々子様だ…」と心の中で呟き、夕食の準備をすることにした。

…と、そんな中…

＞キュルルルル……キュルキュルキュル……＜

庭師と亡霊の会話を跨ぐ様に、可愛らしい腹の音が聞こえてきた。

2人は誰の腹の音なのか首を傾げたが、すぐにその音の原因を見る。

「……／／／」

もじもじしながら鳴る腹を押さえながら茹蛸の様に頬を赤くするデュラ娘の姿があった。

しかし、それでもこれでもか！と言わんばかりに彼女の腹の音は鳴り響く。

恥ずかしさの余り頭から湯気が出始める。

「あの、夕飯…一緒に食べませんか？」

「モクモク……やっぱり寒い日はお鍋よね～」
「今夜はグッと冷え込むますからね」

夕食の時間、鍋をつつきながら会話する2人。
グツグツと煮込みながら美味しそうなもつ鍋である。
しかし、このもつ鍋、どこと無くおかしい部分があった。
……それはと言うもの……

ドドンッと言う効果音が出そうなぐらい鍋が大きいのである。
いくら幻想郷だから常識に囚われないからってこれはないだろ……しかし、幽々子の食欲は普通サイズのもつ鍋では収まらないのだ。
普通サイズだったら、駄々をこねてもっと食べたがるのだ、これに悩んだ妖夢は大サイズの鍋を買ったのだ。
え?、そんなに大きな鍋は売ってない?……だから幻想郷では常識と言うものは（以下略。

「妖夢～おかわり～」

だが、当の本人である幽々子はそんな事を気にせずに妖夢に茶碗を差し出す。
これでもう29杯目である。

「幽々子様、もうこれで29杯目ですよ…」
「もつ鍋が美味しいからご飯が進んじゃうのよ」

いや、いくらなんでもご飯進みすぎですよ……と突っ込みを入れたいのは山々だが……

茶碗を受け取り、ご飯を盛る。
渡された幽々子は再び、鍋をつついてご飯をモクモクと食べ始める。
妖夢は、この食欲を何とかならんのかと何度も考えていたが、今ではすっかり慣れ始めていた
だかしかし……幽々子のおかわりの回数を上回る者が居た。

「……おかわり」

デュラ娘がそう言って茶碗を差し出す。
今の所では、幽々子は２９杯目に対してデュラ娘は３３杯目である。
これには妖夢も絶句するばかりであった、否…あの幽々子でさえ驚く表情だ。

「あの…これでもう３３杯目ですよ？」
「……？」

そんなに食べてたっけ？の表情をしながらデュラ娘は首をかしげる。
首が取れるのにどこにそんな食欲があるのか？……妖夢はそう思いながら茶碗を受け取ってご飯を盛ってデュラ娘に渡す。
デュラ娘も茶碗を渡されたら、再び鍋をつついてご飯を食べる。

そんな中、幽々子はデュラ娘に話しかけた。

「そのままでいいから聞いて頂戴。どうしてあなたはうちの庭に落ちてきたのかしら？」

真剣な表情で幽々子がデュラ娘に問いかける。

デュラ娘も食べるのをやめて、茶碗を置くと、彼女の問いかけに答えた。

「……話は…長くなります……」

それは、霊夢に吹っ飛ばされた後だった。
気を失っていたデュラ娘が目を覚ますと、妖精の森に落ちていたのだ。
辺りを見回しても、妖精が飛んでいたり、遊んでいたりしていた。

「大ちゃーん！早く早く！」
「ま、待ってよチルノちゃーん！」

中には追いかけまわったりする妖精も居て、結構楽しそうである。

「……いいな…私も自由に遊びたい……」

実はデュラ娘も首が取れる体質であるが、妖精である。
だが、種族であるデュラハンは他の妖精たちとは違って姿も見せないし、
死を迎える人間に知らせるために夜中に走り回り、音に反応した人にたらいに一杯に入った血を浴びせるなど……
恐ろしい事に、姿を見られたらその相手の目を鞭で潰すのである。

元いた世界でも、彼女は人間からはひどく嫌われていて、いじめられる事が多かった。
そんな自分に嫌気が差し、自分を変える為に旅立ってきたのである。

デュラ娘は、自由気ままに暮らす妖精たちが羨ましくてしょうがなかった。

「……さっき…トマトジュースを浴びせる人を間違えちゃったけど……まぁいいや…」

それでいいのかい！というような突っ込み話ですよ、奥さん。

だが、どうしたのだろうか、遊んでいた妖精たちが何か恐ろしいものを見たような表情をしながら、次々と逃げていくではないか。

先ほどまでの賑やかさが消え、デュラ娘は何やら怖くなった。

どこか泊まる場所がないと……とにかくやばいと思ったデュラ娘は辺りを見回した。

すると、そこには古ぼけているが小屋があった。

「……今夜はあそこで野宿しよう……」

そう言って、デュラ娘は小屋の前まで近づいて、ドアノブを掴みひねろうとした。

その時だった！、背後から……

＞シューーーー……＜

「ーーーッ！！」

発火音が聞こえた。

デュラ娘は発火音にビクッとすると、すぐさま後ろを振り返った。

そこに居たのは……

まだら模様で緑色をした身体にぽっかり空いた目と口。
小さな足が前後に一対ずつ生えている。
その妖怪は、デュラ娘に近づいて発火音を出していたのだ。
目と目が合ってしまったデュラ娘は思わず呆然としてしまった。

これを読んでいる読者ならばお分かりであろう………
自爆する破壊と殺戮のモンスター「クリーパー」……匠である。
ここで、某アイドル育成ゲームのまな板アイドルの「目と目が逢う～」のＢＧＭを流ししください。
さっきの発火音はクリーパーの自爆カウントだ！。
妖精たちはクリーパーが来ると感づき、逃げていたのだ。

「ヒッ…！」

デュラ娘もクリーパーがやばい…！と感づき、急いで小屋の中に隠れようとしたが時既に遅し……。
クリーパーの身体は白く点滅し、身体が徐々に膨らみ始め……

＞ＢＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＭ！！！＜

自爆した。
デュラ娘の居た小屋は見事に開放感がないとのリフォームにより、ただの木屑と化していた。

な ん と い う こ と を し て く れ た ん で し ょ う 。

匠のすばらしきリフォームによって、何の開放感も無かった小屋

が…開放感溢れるただの木屑となりました。
依頼主？の喜び？の声が聞こえてきそうです。

これがやりかたっただけだろうと声も多いので本編に戻ります。
爆発に巻き込まれたデュラ娘は、吹っ飛ばされて今に至る。

「……。」

話し終えたデュラ娘の顔は青ざめ、プルプルと震えていた。
完全にトラウマである。
彼女の話を聞いていた幽々子と妖夢も、デュラ娘にすごく同情していた。

実はこのところ、人里から離れたくない若者が相次いでいる。
その多くの原因がクリーパーに襲われたからだ。
妖夢でさえ、クリーパーの洗礼を受けた経験もある。
ちなみに、霊夢と魔理沙に紫、あのゆっくりコンビでさえクリーパーには勝てずに洗礼を受けてしまった。

後、にとりも発明品をクリーパーに破壊されたという被害も出たのである。

……これでガストが居たら幻想郷滅ぶんじゃね？、やめて！想像するだけで怖い！。

確かに一晩泊まるだけで行くのは無理な話である。
クリーパーが居る限り、今度こそ彼女の命が無いのだ。それに今は夜なので、妖怪達から襲われる危険性が高い。

そんな中、いつの間にか鍋をつついていた幽々子が、口を開いた。
「じゃあ、ここに住むのはどうかしら？」
「…え？」
「みょん？」

幽々子の言葉にデュラ娘と妖夢はキョトンとした
何せここは白玉楼、人間が入ってはならない場所…冥界であるからだ。
死を迎える人間に死を知らせるデュラハンが住むのは持っての他だ。

「ゆ、幽々子様…いくらそれでも…」
「妖夢、考えなさいな」

妖夢が意見を述べようとしたが、幽々子のオーラに口篭る。
幽々子は、頬にご飯粒を付けながら扇子を開いて扇ぎながら話す。

「確かにこの娘を簡単に住まわせる訳にはいかない。
だけど話を聞いたように……今この娘を追い出せばクリーパーの餌食になる可能性は高い…
もしもそうなれば仕方の無い事……それならばこの話はお終い」
「……」

妖夢は思わず、息を殺してしまった。
こんなに圧力のある幽々子を今まで見た事が無いのだ。
幽々子はご飯粒を取って食べると、デュラ娘に向けてこう言い放った。

「さて、ここは貴女が決めなさい。

貴女はどうしたいの？……ここに住むか、それとも出て行って……独立するか？」
「……私は…」

言い放たれたデュラ娘の心はもう決心が付いていた。
人里に言ってもその村人達から批判を受け続ける…かと言って、妖精の森に住み着こうとしても妖精たちは自分を受け入れるはずが無い。
デュラ娘は息を飲んで、落ち着きを取り戻し……幽々子に向けて答えた。

「……ここに住みます……不束者ですが…お世話になります…」

その答えに幽々子はニコッと微笑む。

「いい決意ね…でもここは厳しいところよ？、耐えれるかしら？」
「……ご飯を食べさせてくれた……家事なら私も……出来ます…」
「そう……」

彼女の心は本当に覚悟を決めていた。
働かざるもの食うべからず、デュラ娘にはその心をずっと刻み込んでいたのだ。
幽々子はデュラ娘の正直な目に、フフッと笑う。

「いいのですか？幽々子様」
「あら？、いいじゃないの……結構賑やかになるし
それに……」
「それに？」

ここに住む事になったデュラ娘に妖夢は心配し、住む事を許した

幽々子に問いかけた。
幽々子は再び鍋をつつきながら、答える……そして、口を開き…

「だって、この娘。私と同じくすごい食欲なのが気に入ったから☆」

ズッコーーーーーーーー！！！

妖夢はズッコケた、そりゃもう特大に。
デュラ娘は落ちそうになった茶碗をあわてながらキャッチして、
鍋がこぼれないように押さえていた。

「今日の妖夢はズッコケるわね～」
「……うん」
「ズッコケさしてるのは誰ですか！？」

そう言って二人はまた鍋をつつきあった。
何気ない会話に妖夢は起き上がって思わず突っ込んだ。
すると、幽々子は何かを思い出したようにデュラ娘に話しかけた。

「そういえば忘れてたわ、自己紹介がまだしてないわね。
私はこの屋敷「白玉楼」の主…西行寺　幽々子」
「申し遅れました……私は幽々子の庭師にして護衛役兼剣術指南役の魂魄（こんぱく）　妖夢です」

２人はデュラ娘に自己紹介をした。

そして次は、デュラ娘が自己紹介をする番である。デュラ娘は茶碗と橋を置いて……2人に礼儀正しくお辞儀をする。

「……はじめまして……私は……見習いデュラハンの……デュラ娘（むすめ）です…」

なんと単純な名前なのだろうか、実はこの名前は彼女の友人だったバンシーがつけた名前である。

彼女の名前を聞いた幽々子は思わず、言ってはいけないことを言ってしまった。

「なんだか、イカの娘の名前にそっくりね～」

「ゆ、幽々子様！それは禁止用語ですよ！」

「…？」

確かに侵略をするイカとちょっと似てるが絶対に触れてはいけない。

妖夢も慌ててその件に関してはやめさせようとしている。

だが幽々子はそんなことも気にせずに……

「さぁ、鍋の具を食べ終わったらお楽しみ雑炊よ～」

「……雑炊…」

鍋の最後の楽しみである、雑炊をデュラ娘と共に食していた。

関係ないですが、皆さんは鍋のシメはうどんですか？　ご飯ですか？　それともパスタ？。

「（まぁ、いっか）」

妖夢は主の行動にはちょっと呆れたが……

これはこれで良いと思った、そして新たに住む事になったデュラ娘を迎え入れる事にした。
今年の鍋は、とても賑やかな夕食となった。

月日が流れ、デュラ娘はと言うと……

「……よーむー……よーむー……♪」
「あの、そんなにくっつかれると掃除しづらいのですが…（汗」

妖夢に一番懐いて、抱きついていた。
白玉楼にずっと居候している、家事も妖夢と一緒にしているのだが、雑巾がけは首が取れるのでできないが……
首が取れない仕事だったらやりこなしている。

「……今日は…一緒に寝よう……背中流しっこしよう……」
「はいはい」

抱きつかれて若干苦笑する妖夢だが、実は心の底からは妹が出来たみたいでかなり嬉しいのであった。
こんなに自分に抱きついてくれるのは、自分のことをとても頼りにされているからである。
いつも抱きついてくるので、自分まで照れてしまうのであるが……幽々子にも抱きついているので妖夢自身もやきもちを焼く事もある。
ただ……そんな妖夢も抱き疲れるとものすごく困る事があった。

＞ポロッ＜

「……あ」
「いやあああああ！！首！首がああああああ！！（涙目」
首が取れるのだけは勘弁して欲しいところである。
しかし、デュラハンなので無理な話だった。

惨殺！デュラ娘　～幽々子と妖夢との出会い～（後書き）

ソドー鉄
「はい、というわけで長らくでしたが……
オリキャラの一人…見習いデュラハンのデュラ娘の話でした」

ゆっくりれいむ
「私が居ない間に、紫の奴、変なの連れてきたわね」

デュラ娘
「……むぅ…変じゃないもん……（ぷくー」

フェイ
「首が取れるだけ変よ」

デュラ娘
「カチン）……人様のオリキャラに……片思いしてるくせに……」

フェイ
「はぁ！？、だ…誰が片思いしてんのよ！？／／／」

デュラ娘
「……そして私は……彼氏持ち…／／／」

フェイ
「あんた、喧嘩売ってる？」

ソドー鉄
「はいはい喧嘩しないの。

ここで2人にお知らせしたいことがあります」

フェイ
「何よ？」

ソドー鉄
「実は……2人ともは白米さんと私の
共同オリキャラとなりました」

フェイ・ゆっくりれいむ
『…は？』

デュラ娘
「…共……同？」

ゆっくりまりさ
「なぁ、ソドー鉄……まさかと言うが、また白米さんにお願いしたのか？」

ソドー鉄
「……てへ☆」

フェイ・ゆっくりれいむ・ゆっくりまりさ
『アホ――――！！！！』

デュラ娘
「……アホー……」

フェイ
「ソドー鉄のバカぁ！！（怒」

デュラ娘
「……ソドー鉄はアホ……」

ゆっくりコンビ
『ソドー鉄でしかもアホー！！！』

ソドー鉄
「私はバカでもアホじゃないぞ！むしろ変態と言う名の紳士だ！（キリッ」

フェイ
「アホかー！！、あんたなんで勝手に
共同オリキャラしちゃったのよ！？
しかもまた白米さんに迷惑掛けて！！（怒」

デュラ娘
「……こうやって…読者が減る原因でもあるよ……」

ソドー鉄
「うんそうだよね……私はずるいよな、
白米さんや読者の皆様方、お前たちにまで迷惑掛けて
ごめんね…」

フェイ
「あの、そんなに自分を責めなくても……」

ソドー鉄
「許してヒヤシンス☆　フェイ頭をヒヤシンス☆（テヘペロ」

フェイ
「……少し、頭冷やそうか？（黒笑」

＼ぎゃあああああああああああ！！！／
―作者を惨殺してます、しばらくお待ちください―

ゆっくりれいむ
「えー……作者が惨殺されましたので
私ゆっくりが代わりに謝罪を申し上げます。
白米様、いつもいつもうちのバカ作者が
ご迷惑をおかけして本当にすみませんでした」

フェイ
「ところで、ゆっくりれいむ。
聞きたい事があるんだけど、
この小説のクリーパーの爆発ってどのくらいなの？」

ゆっくりれいむ
「爆死はしないけどものすごくぶっ飛ばされるし
家が壊滅状態になる、
しかも開放感が無い家には強制リフォームするという
厄介な存在になってるよ」

フェイ
「うわぁ……」

ゆっくりれいむ
「さて次回は久々に私達ゆっくりのクイズコーナーをやるよ！！！」

ゆっくりまりさ

「あー、待ちくたびれたぜ。
フフフ…次回から読者の悲鳴が聞けるぜ」

デュラ娘
「……次回、「第5問の答え発表と解説と第6問」……
リリカルデュラデュラ、テイクオフ……」

フェイ
「混じってる…混じってるから……（汗」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1535v/

ゆっくりれいむとゆっくりまりさのThe☆クイズでしていってね！！！

2011年12月11日10時48分発行